シンボリック相互作用論序説（1）

―― コミュニケーションの社会学理論 ――

桑原　司

目　次

序章　問題の所在

一般に，第一次世界大戦から，1930年代中頃までの約20年間のアメリカ社会学の歴史は，事実上，シカゴ大学社会学科の歴史として描くことができると言われている。コーザーによれば，この間，シカゴ大学社会学科は，「社会学的研究の一般的潮流を方向付け，社会学の唯一の専門雑誌〔＝『アメリカ社会学雑誌』(American Journal of Sociology)〕を発行した。また，社会学科にその足跡を残し，アメリカ社会学協会〔＝アメリカ社会学会〕の会長になったほとんどの社会学者はここで教育を受けた。同学科の教授たちは，もっとも影響力のあるモノグラフや教科書を書いた」(Coser，1978＝1981年，91頁)。とはいえ，こうしたシカゴ学派のいわゆる「黄金時代」は，その1930年代中頃までであり，とりわけ，T.パーソンズを中心とする構造機能主義社会学が，アメリカ社会学のメインパラダイムとしての位置を占めるにしたがって，シカゴ学派は，急速に衰退の一途を辿ってゆくこととなり，次第にアメリカ社会学界から忘れられてゆくこととなった（吉原，1994年，53頁，73頁)。その後，戦後数十年におよぶ空白の後に，再びシカゴ学派に脚光があてられることとなる。そうした動向がフェアリスの言う「シカゴ学派の知的遺産の再発見」なる動きに他ならない(Faris，1967＝1990年，16頁，17頁)。吉原によれば，そうした動向は，「ポスト・パーソンズの社会学の一潮流に棹さしているということに加えて，現代社会学のフロンティアの領域と多様に交叉する可能性を包蔵している」という点で，「シカゴ・ルネサンス」と呼ばれるに相応しいものであるという（吉原，1994年，53頁)。この「シカゴ・ルネサンス」には二つの流れがある。そのうちのひとつは，M.ジャノウィッツを中心とするシカゴ学派「第四世代」であり，それは，都市社会学の領域での理論的・経験的研究の復興に寄与したと言われる。そして，そのもうひとつの流れに位置づけられるのが，ハーバート・ブルーマーに代表されるシンボリック相互作用論（Symbolic Interactionism）に他ならない[1]。「群雄割拠，百家争鳴の有様」（青井，1993年，602頁）にあると言われる現代社会学において，シンボリック相互作用論は，「こんにち，現代社会学の主要潮流の一つを形成するものとなっている」（船津，1993年，45頁）との位置づけを有するものとされている。とりわけ，「現象学的社会学，エスノメソドロジー，解釈学的社会学，役割理論，レイベリング理論，ジェンダー論などといった，社会学および社会心理学の諸学派・諸流派」に顕在的・潜在的な影響を与え続けてきたとされている（後藤，1991年，274-275頁)。わが国においてシンボリック相互作用論の社会学理論を，「もっとも精密に，体系的に論じている」（江原，1986年，64頁）と目されている船津　衛によれば，一口にシンボリック相互作用論とは言っても，そこにはたとえば，人間の主体的あり方を理論的に解明しようとする「シカゴ学派」，自己の経験的・実証的研究に取り組んでいる「アイオワ学派」，ミード理論をワトソン流の行動主義との関連において再検討し，独自の社会的行動主義の展開を目指す「イリノイ学派」，人間の行為や社会のあり方を演技やドラマとして捉え，それを具体的な相互作用場面において解明しようとする「ドラマ学派」などがあるが（船津，1995年，4頁)，こうした数あるシンボリック相互作用論のなかでも，「現代のシンボリック相互作用

論の特徴を余すところなく表現し，包括性，体系性において，他を凌駕し，今日のシンボリック相互作用論のよるべき大樹」（船津，1976年，40頁）と目されているのが，ハーバート・ブルーマー（Blumer, Herbert George, 1900-1987）のシンボリック相互作用論に他ならない。デンジンが「伝統的なシンボリック相互作用論の考え方」を成すものとして挙げているのもまた，このブルーマーのシンボリック相互作用論に他ならない（Denzin，1989b＝1992年，viii）。

ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論が，T.パーソンズを中心とする構造機能主義社会学や，G.A.ランドバーグを中心とする社会学的実証主義（操作主義）を批判し，それに代わる分析枠組みや研究手法を発展させようとしたことはよく知られている。とりわけその分析枠組みに関しては，これまでのわが国の研究においては，それが提示する「動的社会」観が高く評価されてきた（船津，1976年；1989年，211-247頁；1993年；1995年；1998年ｂ，参照）。すなわち，社会を，「主体的人間」（船津　衛）によって形成・再形成される，「流動的な過程」ないしは「変動的」「生成発展的」なものとして捉える，そうした社会観が高く評価されてきた。たとえば船津は，ブルーマーの主著『シンボリック相互作用論』（Blumer, 1969a）の主張を以下のように紹介している。

「・・・・ブルーマーによると，人間は自我を持つことによって『自分自身との相互作用』（self interaction）を行ない，対象を自分に表示し，それを解釈することができる。・・・・ここから，人間は対象に対して積極的に働きかける主体的存在となり，社会は人間によって構成され，変化・変容する動的で過程的なものとなる。・・・・ブルーマーはこのような観点から，機能主義社会学が人間を社会体系や社会構造などの力に単に反応する受身的な有機体とし，また社会を固定的，静的なものとしていると批判する」（船津，1998年ｂ，517頁）。

なお，後藤によれば，戦後アメリカ社会学は，ブルーマーに代表されるこうした社会観を抜きにしては語れない（後藤，1991年，274頁）。

本論は，ブルーマーのシンボリック相互作用論が持つ，分析枠組みと研究手法というこの二つの側面のうち，主として，分析枠組みの側面に焦点を当て，論を展開しようとするものである[2)]。すなわち本論は，ブルーマーのシンボリック相互作用論が持つ「動的社会」観なる，社会に対するものの見方の内実を検討することを，その目的としている。

なお，本論は，ブルーマーのシンボリック相互作用論の主張それ自体をありのままに提示するという意味での学説史研究ではない。かつてブルーマーは，シンボリック相互作用論を展開するにあたって，「他の誰にもましてシンボリック相互作用論のアプローチの基礎を築いたジョージ・ハーバート・ミードの思想に依拠」すると述べつつも，自らの説が「ミードやその他の論者たちの著作では潜在的にしか扱われていなかった多くの問題を明示的に扱い，彼らが関心を抱かなかった重要な諸問題をも論じることで，私自身の見解を展開した」（Blumer, 1969b, pp.1－2＝1991年，１－２頁），「私の個人版」（my personal version）（Blumer, 1962＝1969a, p.78＝1991年，102頁）であると表明したが，この本論もまた，ブルーマーの思想に依拠した，シンボリック相互作用論に関する「私の個人版」としての性格を強く持つものである。その意味で本論は，ブルーマーのシンボリック相互作用論のありのままの姿（neutral stuff）を提示するものではな

いし，またそもそもそうした作業が本質的に可能なことであるとは思われない。

ブルーマーも言うように，ある事柄（thing）のありのままの姿を提示することは，厳密に言うならば，そもそも不可能な行為に他ならない。そこには必然的に，その事柄の解釈を行う側のある一定の「パースペクティブ」（perspective）による色づけないしは加工という行程が介在せざるを得ない[3]。それが人間による「解釈」（interpretation）という行為が持つ回避できない特性なのであり，研究という行為（Research Act）もまた，「解釈」というそうした行為のひとつに他ならない。その意味で研究という行為もまた，人間による解釈という行為につきまとう，こうした宿命から逃れることは出来ない[4]。社会学における学説研究，という研究行為の場合，その事柄（thing）に相当するのは，言うまでもなく，学説という，その学説を提示した社会学者による「解釈」行為の所産（construction）に他ならないが，いわば学説研究とは，その「解釈」行為の所産に対して，それを研究しようとする者が，さらに「解釈」行為を行うという営みに他ならない。すなわち，学説研究を行うということは，その研究者による「解釈の再解釈」（reconstruction of constructions）を打ち出すことを意味する。

とはいえ，そうであるからと言って，研究という解釈行為において，どのような解釈も妥当なものと見なされるというわけではない。とりわけ，研究という解釈行為に必要となるのは，研究を行う者が，研究対象となる事柄（ここでは学説）に対して，どのような観点ないしは視点からアプローチしようとしているのか，それを明示しておく（自覚する）という作業である。その上での創造的解釈，これこそが研究という解釈行為に他ならない[5]。

われわれの視点をここで明示しておくことにしよう。本論は，シンボリック相互作用論において，「個人と社会との関係」が如何なるものと把握されているのか（ないしは論理上，如何なるものと把握され得るのか），そうした視点から，数あるシンボリック相互作用論のなかでも，その原型をなすものと目されている，ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論にアプローチしようとするものである。より具体的に述べるならば，本論は，以下の三つの問いを，ブルーマーのシンボリック相互作用論によって解こうとするものである。

1）シンボリック相互作用論において，個人の「社会化」（socialization）とは，如何なるものと把握されているのか。

2）シンボリック相互作用論において「社会」（society）とは，如何なるメカニズムを通じて，その個人（個々人）により，形成されてゆくものと捉えられているのか。

3）また，そうした社会が，何故に再形成されてゆくものと捉えられているのか。

こうした三つの問を解明することが本論の目的に他ならない。いわば本論は，「社会学の根本問題」（＝「個人と社会」）を，ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブから解明しようとするものである。思うに，かねてよりわが国における，ブルーマーのシンボリック相互作用論に関する諸研究においては，まさにこの根本問題を念頭においた研究が充分になされてきたとは言いがたい。

これまでわが国の研究においては，対パーソンズの社会学（ないしはポスト・パーソンズ）

を意識しすぎるあまり，ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブは，それが本来持つ役割としての社会を見る分析枠組みとしてではなく，もっぱらパーソンズ社会学を攻撃する手段として，ないしはパーソンズ社会学から自らを隔てる主義確立の手段として扱われる傾向が強かったように思われる。いわばブルーマーのパースペクティブは，社会を見るひとつの視点（perspective）としてではなく，学界における勢力争い（それは一面ではアメリカ社会学界の代理戦争という形を取っていたが）のためのスローガンとして利用されてきた，と言っても過言ではあるまい。例えば，船津　衛は，その一連の論考（船津，1976年；1983年；1993年；1995年）を通じて，ブルーマーやその他のシンボリック相互作用論者の主張に基づいて，構造機能主義社会学の社会観（や研究手法）に対して，繰り返し批判を展開している。とりわけその船津の諸著作のなかでも，最も引用頻度が高いものと思われる『シンボリック相互作用論』（船津，1976年）において，船津は「シンボリック相互作用論は，パーソンズを中心とする機能主義社会学と真っ向から対決するもの」であると述べ（船津，1976年，24頁），シンボリック相互作用論に依拠した自己の立場を「機能主義社会学と相反する位置に自己をおき，それと異なる道を進むことになる」（船津，1976年，25頁）ものとしている。船津を中心とする，わが国のシンボリック相互作用論のこうした一動向を捉えて，富永は次のように評している。すなわち，「日本では，シンボル的行為主義〔＝シンボリック相互作用論〕はまだ紹介の段階を出ていないが，船津衛『シンボリック相互作用論』（1976年）に見るように，これを『主義』として硬直化するブルーマー的態度が無批判に踏襲されている。日本においてアメリカで展開された対立の代理戦争をする必要はない」（富永，1995年，342-343頁）。また，加えてわが国の研究においては，そうした主義を歴史的・学説史的に正当づけるために，ブルーマーのシンボリック相互作用論が，アメリカ社会学の古典的存在，シカゴ学派社会学や，プラグマティズム哲学，就中，G.H.ミードの思想にその知的源泉を持つことなどがもっぱら主張されてきた[6]。とはいえ，その反面，ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブを，まさしくパースペクティブとして，すなわち，社会を見る分析枠組みとして検討・洗練するという作業が充分にはなされてこなかったのではなかろうか。すなわち，これまでの研究においては，仮想敵国として措定されていたパーソンズ社会学との理論的・方法論的差異ばかりが強調され，その反面，そこで差異化されたブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブそれ自体の内実の検討・洗練がおろそかになっていた，とは言えないであろうか。その証拠に，これまでわが国の研究においては，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，個々の人間が社会化されるそのメカニズムの追求が充分になされてきたとは言いがたいし[7]，また社会とは，「主体的人間」により形成・再形成されるものと捉えられる，と主張はされてきたものの，その形成のメカニズムがつぶさに解明されてきたとも言いがたい[8]。また社会というものが，何故に再形成されるものと捉えられなければならないのか，その論理的必然性が解明されてきたとも言いがたい[9]。

とはいえ，ブルーマーのシンボリック相互作用論に関するわが国の如上の研究傾向は，何も，わが国の論者にのみその責が帰せられるわけで

はない。ブルーマーによるシンボリック相互作用論に関する諸著作の特性にもまた起因するものであるとも言える。

ブルーマーのシンボリック相互作用論を社会を見る分析枠組みとしてつぶさに検討・洗練する，という作業が充分にはなされてこなかった理由の一つには，ブルーマーの諸論考の特異性が挙げられる。すなわち，1）ブルーマーの場合，シンボリック相互作用論を展開するにあたって，自らの立場を精緻に体系的に論じるというよりも，「対立する立場のごく包括的な批判を行い」，「いっそう妥当と考えられる方法と理論のアウトラインを素描〔強調は引用者〕」するという論述スタイルを取っていたということ（後藤，1991年，308），またよく言われるように，2）ブルーマーの論述には，論旨・主張の繰り返し，重複があまりに多いということ（富永，1998年，50頁），さらに，3）ブルーマーの描いたパースペクティブが，「感受概念」(sensitizing concept) として，すなわち，体系的な理論化が完成された一般理論 (general theory) としてではなく，経験的研究を通じた理論化を行う上での出発点ないしは前提（たたき台）として位置づけられたものであったということ (Blumer, 1954；1969b)，という三点が挙げられる。ブルーマーによるシンボリック相互作用論の領域における諸論考が持つ，こうした特異性が故に，彼のパースペクティブを社会を見る分析枠組みとしてつぶさに検討・洗練して行く，という作業が閑却されてきたとも言える[10]。

なお，本論の目的を遂行するに際して，看過してはならない重要な論点がある。それは，個々人が社会化されるそのメカニズムとは如何なるものなのか，個々人が社会を形成するそのメカニズムとは如何なるものなのか，そして，そうした社会を何故に再形成への扉を開くものと捉えなければならないのか（その論理的必然性とはどのように説明されるのか），この三つの問を，ブルーマーのシンボリック相互作用論の概念的柱石となっている「自己相互作用」(self-interaction) 概念との確固たる結びつきのもとに明らかにしなければならないという論点である。では何故にそうした論点を看過してはならないのか。

まず，社会の形成・再形成という観点からするならば，もしそうした論点を看過すれば，結局のところ，その社会の作動原理を，諸個人の行為から切り離されて捉えられた社会それ自体のメカニズムに帰着するものと捉えてしまうことになるからである。ところがそうした立場は，まさにブルーマーが批判したものであった。ブルーマーは，社会を「それ自体の原理にしたがって作動」(following their own dynamics) する「一種の自己作動的な実体」(self operating entities) ないしは「ひとつのシステムとしての性格 (character of a system) を有するもの」と捉える立場を指して，「重大な誤りである」と痛烈に批判している (Blumer, 1969b, p.19＝1991年，24-25頁)[11]。ブルーマーによれば，「〔ある社会の〕ネットワークや制度は，社会が有する何らかの内的な原理やシステムの要件などによって自動的に機能しているわけではない。それが機能するのは，様々な位置を占める人々が何らかのことを行うからである。そして彼らが何を行うかは，自らがそこにおいて行為しなければならない状況を，〔自己相互作用を通じて〕彼らが如何に定義するか次第なのである」(Blumer, 1969b, p.19＝1991年，25頁)。日常生活のルーティーン化した行動からドラスティックな社会

変動をもたらす集合行動に至るまで，常にそこには人間による自己相互作用の過程が介在している。まさに伊藤も言うように，ブルーマーが指摘してやまない最大の問題とは，「こうした過程〔自己相互作用の過程〕を等閑視して，社会的相互作用を語り，マクロな社会の形成・存立・変動を語ることの無意味さ」（伊藤，1995年ａ，120頁）[12] に他ならない。こうしたブルーマーの立場を明示的に提示するためにも，社会の形成・再形成の論理を，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにすることが必要となる。

次に，個人の社会化という観点からするならば，自己相互作用という営みと，社会的なるものとの関わりを閑却することは，すなわち，「自己」を構成するふたつの側面である「『主我』と『客我』の相互作用」(interplay between the "I" and the "me")の内実を明らかにすることを目的として（Blumer，1993，pp.185-186），この概念を提示したブルーマーの意図を，われわれが半ば放棄してしまうことにつながってしまうからである（ここでは通説にしたがい，「主我」を人間の主体性を表すものとして，また「客我」を人間の社会性を表すものとして捉えている）[13]。たとえば船津は，ブルーマーのこの概念を，ミードの「自己」に関する議論のうち，「主我」の内実を明らかにするものである，と捉えているが（船津，1989年，224頁），上記のように，ブルーマーは，この概念を提示することにより，主我の側面のみを明らかにすることを企図し，「客我」の側面を閑却した議論を展開しようとしたわけではない。従来，彼のこの概念に関しては，こうしたことが充分にくみ取られて来なかったがために，彼のこの概念を軸としたシンボリック相互作用論の諸前提に関する議論は，わが国においても，海外においても，「主観主義」的な立場を標榜するものと捉えられてきた[14]。

本論は次のような構成を取っている。まず続く第１章においては，ブルーマーのシンボリック相互作用論の概念的柱石となっている，この「自己相互作用」概念の内実が明らかにされる。その上で，その概念を，社会的なるものとの関わりにおいて詳細に検討する。そうした検討を通じて，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，個人の社会化という現象が如何なるものとして把握されているのか（ないしは論理上如何なるものと把握され得るのか），その内実が明らかにされる。また同時にこの章では，そうした自己相互作用に媒介された「個人と世界との関係」を，ブルーマーがどのように捉えていたのか，さらにそうした「関係」把握をふまえた上で，ブルーマーにおいて，個人の「行為」(act, action）とは，如何なるものと捉えられるのか，その内実が明らかにされる。その上で，第２章においては，そもそもブルーマーにおいて「社会」とは如何なるものと捉えられているのか，また，そうした社会が，自己相互作用の担い手としての「人間」によって，如何なるメカニズムにより形成されていると，ブルーマーが捉えているのか（もしくは，論理上どのように捉えられ得るのか），その内実が明らかにされる。そして第３章においては，第２章で明らかにされた「社会」を，何故に再形成への扉を開くものとして捉えなければならないのか，その論理的必然性が，彼の自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにされる。なお，本論において検討に付される，ブルーマーの社会観（「動的社会」観）は，彼の方法論においては，「感受概念」(sensitizing concept）の

範疇に入るものとして位置づけられている。それ故，この社会観に関する考察は，それを経験的に検証・展開する手段の考察を抜きにしては，十全には行われ得ない。そこで終章では，如上の三つの章における諸議論により得られた知見を，経験的に検証・展開するに際して，その研究手法（検証・展開手法）の鉄則となる「行為者の観点」(standpoint of the actor) からのアプローチについて検討し，そのアプローチを実際に実行する上での種々の留意点ならびに問題点を析出することで，今後のわれわれの課題を明示することにしたい。

第１章　自己相互作用と行為

第１節　自己相互作用――シンボリック相互作用論の三つの基本的前提をもとに――

ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組みを論じるにあたって，必ずと言って良いほど，議論の中心におかれるのが，彼の「自己相互作用」(self interaction)という概念である。ブルーマーによれば，「自己相互作用」とは，「自分自身との相互作用」(interaction with one-self) とも言われ (Blumer，1966＝1969a，p.62＝1991年，79頁；1993，p.164)，それをブルーマーは，「文字通り，個人が自分自身と相互作用を行っている過程」(Blumer，1993，p.186) であるとか，「個人が自分自身に対して話しかけ，それに対して反応する，というコミュニケーションの一形態」(Blumer，1969b，p.13＝1991年，17頁) であると表現している。この概念は，船津によれば，「人間が社会的相互作用において，単に他の人間と相互作用するだけではなく，自分自身とも相互作用」を行っていることを強調するために，ブルーマーが提示したものである（船津，1983年，104頁）。周知のように，この概念は，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，その概念的柱石として措定されているものであり(Wallace and Wolf，1980＝1985年，299頁)，それは「解釈の過程」(process of interpretation，interpretative process) と同義のものとして扱われている (Wallace and Wolf，1980＝1985年，321-322頁)。さらに，ブルーマーによれば，この自己相互作用概念があるからこそ，シンボリック相互作用論は，それ独自の社会学的・社会心理学的パースペクティブとして，そのアイデンティティを確保しているといっても過言ではない。ブルーマーによれば，「シンボリック相互作用論というパースペクティブは，・・・・人間の行為を研究する上で，自己相互作用の過程を何よりも重要なものと考える唯一の分析枠組みである」(Blumer，1993，p.191)[1)]。したがって，ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組みを論じるにあたって，この概念の検討を看過することは出来ない。以下では，ブルーマーによるシンボリック相互作用論の三つの基本的前提を検討することを通じて，この概念の内実に迫ることにしたい。彼の人間観，行為観，社会観もまた，この三つの基本的前提に依拠して構成されている (Blumer，1969b，p.6＝1991年，７頁)。

ブルーマーは，その「シンボリック相互作用論の方法論的な立場」(Blumer，1969b) と題する論文の冒頭において，シンボリック相互作用論の依拠する三つの基本的前提を以下のように提示している (Blumer，1969b，p.2＝1991年，２頁)。

１）人間は，事柄 (thing) に対して，その事柄が自分にとって持つ意味 (meaning) に基づい

て行為する。

2）そうした事柄の意味は，人間がその相手と執り行う社会的相互作用（social interaction）より，導出され発生する。

3）こうした事柄の意味は，その人間が，自分が出くわした事柄に対処する際に用いる解釈の過程（interpretative process）〔＝自己相互作用〕を通じて，操作されたり修正されたりする。

まず第一の前提についてであるが，この前提の枢要点となっているのは，人間がある「事柄」に対して行う行為のやり方ないしその様式は，その事柄がその人間にとって持つ「意味」によって定められているということである。

ブルーマーによれば，ここで「事柄」には「人間が自らの世界において気にとめるであろうあらゆるものが含まれている。木や椅子といった物的な物，母親や店員といった他者たち，友人や敵といった人間に関する各種カテゴリー，学校や政府といった諸々の機関，個人の独立とか誠実さといった指導的理念（guiding ideals），命令，要求といった他者たちの活動，〔その他〕日常生活において個人が出くわすであろう種々の状況」が含まれている（Blumer，1969b，p.2＝1991年，2頁）。

上記の第一の基本的前提において，こうした意味での，ある人間にとっての「事柄」と「意味」のセットが，ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組みにおける「対象」(object)を構成することとなる。また，そうした対象が，ある人間に対して持つ「特性」(nature）は，その対象がその人間にとって持つ意味により定められ，さらに，そうした意味の如何によって，その対象に対するその人間の行為のやり方が定められることとなる。ブルーマーによれば，「対象の特性（nature of a object）は，それが如何なる対象であれ，それを自らにとっての対象としている人間に対して，その対象が有している意味から構成されている。こうした意味によって，その人が対象を見るやり方，それに対して行為しようとするやり方，それについてどう話そうとするのか，そのやり方が設定される」(Blumer，1969b，p.11＝1991年，13頁)。ブルーマーは，便宜上，この「対象」を三つに分けている。すなわち，「(a) 物的対象（physical object)。椅子や木や自転車など。(b) 社会的対象(social object)。学生，僧侶，大統領，母親，友人など。(c) 抽象的対象（abstract object)。道徳的な原理，哲学学説，もしくは正義，搾取，同情などといった観念」(Blumer，1969b，pp.10-11＝1991年，13頁)。さらに，ブルーマーの分析枠組みにおいては，人間を取り巻く「環境」(environment）とは，こうした「対象」からのみ構成されるものと捉えられており，それ故に，そうした対象の特性（意味）の如何によって，その環境が人間にとって持つ特性が定められることとなる。ブルーマーによれば，「〔人間にとっての〕環境（environment）とは，ある特定の人間が認識し知っている対象からのみ構成されるものである。こうした環境の特性とは，それを構成する種々の対象が，そうした人間にとって持つ意味によって設定されるものである」(Blumer，1969b，p.11＝1991年，14頁)。この意味での「環境」こそ，ブルーマーのシンボリック相互作用論のキー概念となっている「世界」(world）という概念に相当するものであることは言うまでもない（Blumer，1969b，p.11＝1991年，14頁)。

さて，ブルーマーによれば，上記の第一の基本的前提だけでは，シンボリック相互作用論を

それ以外のアプローチから区別することは出来ないという。というのも，こうした前提を共有しているアプローチが他にもあるからである。シンボリック相互作用論とそれ以外のアプローチを区別する分水嶺は，主として次の第二の基本的前提によって定められる，とブルーマーは考えている（Blumer, 1969b, p.3＝1991年， 4頁)。その第二の基本的前提が示唆する内容を説明するに先立って，ブルーマーは，この第二の基本的前提が論敵としている「意味の源泉」(source of meaning) に関するふたつの伝統的な立場を以下のように説明している。

まず第一の立場においては，ブルーマーによれば，事柄の意味とは，その事柄に内在的に備わっているもの，ないしは「その事柄の客観的な構成として，その事柄に生来的に備わっている一部分」と捉えられている。したがって，この立場においては，「椅子はそれ自体明らかに椅子であり，牛は牛，雲は雲，反乱は反乱などなど」それを取り扱う人間の如何に関わらず，その意味は，その事柄に，生来的ないしは内在的に定まっているものとされることとなる。こうした立場に立つものとしてブルーマーが挙げているのが，「哲学における伝統的な『実在論』(realism) の立場」に他ならない (Blumer, 1969b, pp.3-4＝1991年， 4頁)。

次に第二の立場においては，ブルーマーによれば，事柄の意味とは，「その事柄がその人にとってその意味を持つ〔ある特定の〕人間によって，その事柄に対して心的付加物として与えられたもの」と捉えられている。さらに，この立場においては，その「心的な付加物」(psychical accretion) とは，その人間の心や精神，ないしは心理的な組成を構成する諸要素が外部へと表出されたものと捉えられており，そうした諸要素には，「感覚 (sensations)，感情 (feelings)，観念 (ideas)，記憶 (memories)，動機 (motives)，態度 (attitudes)」などが含まれているとされている (Blumer, 1969b, p.4＝1991年， 4 － 5 頁)。ここでブルーマーは，この立場に立つものとして「古典的心理学」(classical psychology) や「現代の心理学」(contemporary psychology) を挙げているが，ここで「心理学」とは，おそらくは，「構成心理学」(structural psychology) のことを指しているものと思われる[2]。

ブルーマーは，意味の源泉に関するこうした二つの伝統的な立場のいずれとも異なる立場を表明するものとして，シンボリック相互作用論の第二の基本的前提を提示している。ブルーマーにとって，事柄の意味とは，その事柄に生来的に内在するものでも，人間個人によって主観的ないしは心的に付加されるものでもない。それは，まず何よりも，人間間の社会的相互作用の過程から生じるものと捉えられている。この第二の基本的前提が含意する内容を，ブルーマーは以下のように説明している。

「シンボリック相互作用論においては，意味とは，人間間の相互作用の過程 (process of interaction) から生じるものと考えられている。すなわち，ある人間にとってのある事柄の意味とは，他の人々がその事柄との関連においてその人に働きかける，そのやり方から生じてくるものと考えられている。他者の行為がその人にとっての事柄を定義するように作用するのである」(Blumer, 1969b, pp.4-5＝1991年， 5 頁)。

このブルーマーの第二の基本的前提については，ウォーラスらが的確な例示を試みている。以下の例は，彼らが，ブルーマーのシンボリック相互作用論のこの第二の基本的前提を例示するために提示したものである。

「この例〔ブルーマーの第二の基本的前提の例〕としてあげてよいのは，野球のバットがアメリカのティーンエージャーにとって意味しているものと野球の試合というものを一度もみたことのないアフリカのピグミー族の人にとって意味するものとを比較してみることであろう。もう一つの例は，歌に必要な楽器モリモの，ピグミー族にとっての意味と，アメリカ人にとっての意味を較べてみることである。自らが属する文化を共有する他の人々との相互作用を通じて，人は誰でもさまざまな道具を，例えばスポーツのため，あるいは宗教的祭儀のためというように，色々な使い方をして楽しむことを学ぶのである。野球のバットがピグミー族の人々にとって謎めいたものに見えるように，モリモが中心的な役割を受けもつ聖なる祭りを経験したことのないアメリカ人にとっても，モリモは同じように謎めいたものに見えるに違いない。バットもモリモも重要な文化的道具であり，両者の意味は社会に暮らす他の人間との相互作用から生まれてくるのである」(Wallace and Wolf, 1980＝1985年，320-321頁)。

すなわち，ある人間にとっての事柄の意味とは，その事柄との関連において，その人間と相互作用を行っている他者たちが，その人間に対して行為する，その行為のやり方ないしは様式から生じるものと捉えられる，というのが，「意味の源泉」に関するブルーマーのシンボリック相互作用論の立場に他ならない。上記のウォーラスらの例でいえば，アメリカ人にとって「バット」という対象（ここでは物的対象）が，まさしく野球のボールを打つための道具としての意味を持つのは，そうしたアメリカ人の日々の暮らしの中で，その人と相互作用を行っている他者たちが，その人の面前で（その人に対して）そうした道具として，そのバットを扱ってきたからであり，そのバットという対象に，あらかじめそうした意味が内在化されているわけではない。その証拠に，ピグミー族の人々にとっては，それは「謎めいたもの」としての意味しか持ち得ない。

なお如上の意味で，ブルーマーのシンボリック相互作用論において事柄の意味とは（その結果として対象とは），「社会的所産」(social product) であるとされている (Blumer, 1969b, p. 5＝1991年，5頁)。たとえば，「言語」という対象を例に取ってみよう。ブルーマーの類別にしたがうならば，この「言語」という対象は「抽象的対象」に相当する。抽象的対象の例として哲学学説などが挙げられていたことからも，そのことは理解されよう。如上の第二の基本的前提に依拠するならば，この「言語」という対象の意味は，生来的にその対象に内在化されているものでもなく，また，一個人によって主観的にその対象に付与されたものでもない。ある個人にとってのこの「言語」という対象の意味もまた，それを，その個人と相互作用を行っている他者たちが，その個人の面前で，どのように用いるかによって定められるものと捉えられる。われわれにとって身近な例を挙げるならば，シンボリック相互作用論の領域において「世界」(world) という言語が，ある個人にとっての事柄と意味のセットとしての「対象」からのみ構成された領域を表す言語として，まさしくそうした意味をわれわれに対して持つのは，実際にシンボリック相互作用論の領域において，「世界」という言語を，その領域に関わる（われわれにとっての）他者たちが，そうした内容を含意する言葉として用いているからであり，そうした他者たちのその「言語」の使い方が，その

他者たちと相互作用を行っているわれわれ一シンボリック相互作用論者の面前で行われているからに他ならない。同じ「世界」という言語でも，一般社会の人々に対しては「地球上に存在するすべての国家・住民社会の全体」[3) という，上記の「世界」の意味とは，また別の意味を持っていることからもそのことは理解されよう。何故に意味が異なっているのかと言えば，一般社会においては，そこにおいて，他者たちが，その「世界」という言語を用いるその用い方が，シンボリック相互作用論の領域におけるそれとは異なっているからである。このように「言語」もまた，「対象」のひとつの類型なのであり，それは，それを用いる他者たちの用い方を抜きにしては「意味」を持ち得ない。すなわち，「言語」という「対象」の「意味」もまた，それを用いる他者たちの用い方如何によって定められるものと捉えられなければならないことになる[4)]。

また，社会的対象についても同様に説明することが出来る。社会的対象として，学校に私服を着てきたある高校生という例を取りあげてみよう。この高校生は，私服を禁じ制服を着てくることを義務づけている高校においては明らかに「逸脱者」としての「意味」を，たとえばその学校に通っている他の生徒たちに対して持つこととなる。とはいえ，私服通学を許可している高校においては「逸脱者」とは見なされない(つまりその高校生は，その学校の生徒たちにとって「逸脱者」としての「意味」を持つことはない)。なぜなら，前者の学校においては，その学校が（というよりも，その学校の教員が)，その私服を着てきた学生を，まさしく「逸脱者」として，その学校の生徒たちの面前で扱っているからであり，逆に後者の学校においては，教員たちが，その学校の生徒たちの面前で，そうした扱い方を，その学生に対して行っていないからである。というわけで，学校に私服を着てきたその高校生それ自体に「逸脱者」という意味が内在化されているわけではないのである[5)]。

ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，ある対象（となる事柄の意味）とは，社会的相互作用の文脈において形成され，人々によってそこから引き出されるものと捉えられている。また人間は，そうして形成された意味に基づいて，その対象（となる事柄）に対して行為を行う。換言するならば，そうして形成された対象の意味が，その人間のその対象（となる事柄）に対する行為の様式を定めることとなる。ここまでが，シンボリック相互作用論の第二の基本的前提によって説明されたテーゼである。とはいえ，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，人々による意味の使用が，ここで生み出された意味を，単に適用する以外のなにものでもないと捉えられているわけではない(Blumer, 1969b, p.5＝1991年，6頁)。シンボリック相互作用論とそれ以外のアプローチとをいっそう区別するものとして，ブルーマーが提示するのが，シンボリック相互作用論の第三の基本的前提に他ならない。

ブルーマーが，シンボリック相互作用論の三つの基本的前提のなかでも，とりわけ重視し強調するのが，この第三の基本的前提である。すなわち，他者によってもたらされた，その人間にとっての事柄の意味（対象の意味であるとも言える）は，その人間によってそのまま自動的に適用されるものではなく，それは必ず，その人間の「解釈の過程」(process of interpretation)を通じて，操作されたり修正されたりするものと捉えなければならない。ブルーマーは，「行

為者による意味の使用は，ひとつの解釈の過程（*a process of interpretation*）を通じて生じるものと見なされる」（Blumer, 1969b, p.5＝1991年，6頁）と断った上で，その解釈の過程（＝自己相互作用）について以下のように述べている。

「この過程にはふたつの別個の段階がある。まず第一に，行為者は，自らがそれに対して行為している事柄を，自分自身に表示（indication）しなければならない。彼は意味を持つ事柄を自分自身に指し示す（point out）という営みを行わなければならない。・・・・第二に，解釈（interpretation）は，意味の操作（handling of meanings）という事象となる。行為者は，自分がおかれている状況や自分の行為の方向に照らして，その意味を選択したり，検討したり，保留ないしは未決定にしたり，再分類したり，変容したりするのである」（Blumer, 1969b, p.5＝1991年，6頁）。

すなわち，解釈の過程（＝自己相互作用）には，「表示」と「解釈」というふたつの段階があり，前者の段階において，行為者は，先行する社会的相互作用の過程を通じて形成された「対象」を自分自身に指し示し，後者の段階において，その「対象」（となる事柄の意味）を，自己がおかれている状況とそれに対する自らの行為の如何という観点から再検討することとなるわけである。さらに，こうした過程を経て確定されたその行為者にとっての「対象」（となる事柄の意味）が，その行為者にとっての「自らの行為を方向付け形成するための道具（instrument）」として，その行為者のその後の行為を導いて行くこととなる[6]。

ここまで筆者は，終始，「解釈の過程」＝「自己相互作用」と捉え，その「解釈の過程」に関して議論を展開する一方で，「自己相互作用」の内実を等閑視してきた。そこで以下では，この「自己相互作用」概念の内実，および，如何なる意味で「自己相互作用」＝「解釈の過程」なのか，その理由を明らかにすることにしたい。

本節の冒頭でも述べたように，ブルーマーにおいて，自己相互作用とは，「自分自身との相互作用」と捉えられており，より詳細には「文字通り，個人が自分自身と相互作用を行っている過程」ないしは「個人が自分自身に対して話しかけ，それに対して反応する，というコミュニケーションの一形態」と捉えられていた。すなわち，他者との間で行う社会的相互作用を自分自身と行うのが，換言するならば，他者との社会的相互作用を個人のうちに内在化(internalize）させたものが，ブルーマーの言う「自分自身との相互作用」すなわち「自己相互作用」に他ならない（Blumer, 1969b, p.5, p.14＝1991年，6頁，18頁）[7]。

では，ブルーマーにおいて，その社会的相互作用とは如何なるものと捉えられているのか。ここで先に論じたシンボリック相互作用論の三つの基本的前提を想起されたい。まず第二の基本的前提が示唆するように，社会的相互作用とは，そこにおいて他者たちが，ある個人にとっての，ある事柄の意味を定めようとしている過程であった。その事柄の意味によって，その個人のその事柄に対する行為のやり方が定められるということは（第一の基本的前提），すなわちこの過程は，その個人が如何に行為するべきかを，他者たちが定める過程であるとも言える。この過程が，ブルーマーの言う「定義」（definition）ないしは「表示」（indication）の過程に他ならない（Blumer, 1966＝1969a, p.66＝1991年，84頁）。次に第三の基本的前提が示唆していたように，個人は，他者によるその「表示」を，

「解釈の過程」を通じて解釈している。ブルーマーの言う「他者の行為や言及の意味を確定」する「解釈」(interpretation) の過程がこれに相当する (Blumer, 1966＝1969a, p.66＝1991年, 84頁)。以上明らかになったように, ブルーマーにおいては, 社会的相互作用とは,「表示」と「解釈」からなるものと捉えられているのであり, それ故, それが個人の内に内在化されたものとしての「自己相互作用」もまた, 等しく「表示」と「解釈」からなるものと捉えられなければならない。というわけで,「自己相互作用」とは,「解釈の過程」と同義の概念として提示され得るのである。

以上, 本節において得られた知見を総括するならば, それは次のように捉えられよう。

1) 人間がある「事柄」(thing) に対して行う行為は, その事柄がその人間に対して有する「意味」(meaning) に基づいて行われる。換言するならば, その意味が, その事柄に対するその人間の行為の様式を定めることとなる。

2) こうした, ある人間にとっての事柄と意味のセットが, その人間にとっての「対象」(object) を構成する。また人間にとっての「世界」(world) とは, こうした対象からのみ構成されるものとブルーマーにおいては捉えられている。

3) こうした事柄の意味は, その事柄に生来的に内在しているものでも, 一個人が主観的に付与するものでもない。それは, 当の個人と社会的相互作用を行っている他者たちが, その事柄との関連において, その個人に対して行為するそのやり方から生じるものである。すなわち, 他者たちのその事柄に対する行為の様式が, その個人にとっての事柄の意味を（したがって対象を）定義することとなる。

4) とはいえ, 社会的相互作用から導出された事柄の意味は, それを扱う行為者によってそのまま自動的に適用されるものと, ブルーマーにおいては捉えられているわけではない。行為者は, その意味を使用するに先立って, その行為者自身の「解釈の過程」(process of interpretation)（＝自己相互作用）を通じて, その意味を再検討し, その上で, その意味を, 自分自身の行為を導く「道具」(instrument) として用いることとなる。なお, ここで「解釈の過程」（自己相互作用）とは, 他者と行う社会的相互作用を, 個人の内に内在化させたものに他ならない。いわば, 事柄の意味は,「社会的相互作用」と「自己相互作用」という, 二つの社会的相互作用を通じて, 生成・再生成されるものと捉えられなければならない。

行為者が, 社会的相互作用を通じて, 他者よりもたらされた「対象」を, 自分自身の「解釈の過程」ないしは「自己相互作用」を通じて, 自らの行為を導く道具として仕立て上げて行く, このプロセスこそ, ブルーマーの言う「意味付与」(confering of meaning) の過程に他ならない (Blumer, 1962＝1969a, p.80＝1991年, 104頁)。いわば,「自己相互作用」とは, 人間が, 自分自身と世界との関係を確定しようとする営みであると言える。

こうした, ブルーマーの自己相互作用に関する立論については, これまで, それが個人の社会に規定される側面を看過した議論であるとか (「自己相互作用」論における「社会化」論の欠如), それは, 個人と世界との関係を論じるにあたって, 人間の主観（自己相互作用の営み）を強調しすぎた観念論的な発想である, とする批判が寄せられてきた。次節に見る「主観主義」

批判がそれに他ならない。そこで次節（第２節）では，まずその批判の内実を明らかにすることにしたい。その上で，その明らかにされた批判に答える形で，続く第３節においては，ブルーマーにおける「社会化」把握が自己相互作用概念との関わりのもとに明らかにされる。そして第４節においては，同じく批判に答える形で，ブルーマーが「個人と世界との関係」を如何なるものと把握していたのか，その内実が自己相互作用概念との関わりのもとに明らかにされる。

第２節　ルイスによる主観主義批判――「自己相互作用」論をめぐって――

かねてより，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対しては，それが「主観主義的」な性格を有したものであるとの批判が寄せられてきている。

ブルーマーのシンボリック相互作用論の主観主義的な性格を批判する論考は数多い[8)]。そのなかでも，最も包括的で体系的な批判を行っているのは，Ｊ.Ｄ.ルイスの論考（Lewis,1976)[9)]である。

ルイスは，その「シンボリック相互作用論の始祖としての古典的アメリカのプラグマティスト」(Lewis, 1976) と題する論文のなかで，シンボリック相互作用論（なかでもとりわけ，ブルーマーのシンボリック相互作用論）が「主観主義的」(subjectivistic) な性格を有したものであると批判している。彼によれば，「初期プラグマティストたちは，大別してふたつの流派に分けられる。〔そのうちのひとつは〕パースとミードの社会的実在論（social realism）の立場であり，〔もうひとつは〕ジェームズとデューイの主観主義的名目論（subjective nominalism）の立場である。このうち，シンボリック相互作用論は，本質的に後者（the James-Dewey pragmatism）の延長上に位置するものである」(Lewis, 1976＝1992, p.138)。さらに，ルイスによれば，そうした主観主義的な立場を標榜する最たるシンボリック相互作用論者が，ブルーマーに他ならない（Lewis, 1976＝1992, p.138)。

ルイスは，ブルーマーのシンボリック相互作用論を「主観主義的」なものであると批判するにあたって，まず彼の理論の思想的源泉を跡づけることから議論を始めている。

ルイスによれば，確かにミードは，1900年代の初期に，ブルーマーが学んだシカゴ大学社会学科において多大な影響力を持っていたが，同時にそこでは，哲学・心理学・論理学においてＪ.デューイが支配的な影響力を及ぼしてもいた。その結果，学生たちには，ミードの思想を，デューイのパースペクティブを通して解釈するという傾向が生じ，そのため，彼ら二人の微妙ではあるが重要な思想的差異が曖昧なものとなってしまった，とルイスは言う（Lewis, 1976＝1992, p.146)。ミードの主著と目されている『精神・自我・社会』(Mead, 1934) は，彼の死後，彼の講義録をもとに，当時の哲学科の学生たちによって編集されたものであるが，これは本来，社会→自我（＝「自己」）→精神という順序で論じられなければならないものであるにも関わらず，彼らは精神→自我→社会という順序で論じてしまった。ここにデューイの影響が色濃くあらわれている，とルイスは指摘する（Lewis, 1976＝1992, pp.146-147)。精神や自我をもとに社会を説明するというやり方は，デューイによって提起された個人主義的・主観主義的社会心理学を想起させるものである，とルイスは論難した上で，その立場をシンボリック相互作用論，なかでもとりわけ，ブルーマーのシン

ボリック相互作用論は継承したのだとルイスは捉えている。「シンボリック相互作用論者たちは，もともと不十分だった哲学科学生〔のミード理解〕をそのまま残すことになってしまった」とルイスは述べている（Lewis, 1976＝1992, p. 147)。

では，ブルーマーのシンボリック相互作用論は，如何なる意味で主観主義的な性格を持つものとされているのであろうか。ルイスの批判するところでは，ブルーマーのシンボリック相互作用論の「理論」（theory）は，人間個人による社会的・物的環境（social and physical environment）に対する定義と解釈とを強調しすぎるものとなってしまっている，と言う（Lewis, 1976＝1992, pp.147-148)。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，個人とその社会的・物的環境との関係を決定するのは，その個人の解釈や定義であるとされている（Lewis, 1976＝1992, p.144, pp.147-148)[10]。そう論難した上で，ルイスは，ブルーマーのシンボリック相互作用論の概念的柱石となっている「自己相互作用」(self-interaction) 概念に関して，次のように批判している。

「他からの拘束を受けない自由意思に基づく，独自な特性を持つ個人が，みずからの自由な意思に基づいて，種々の事柄を自分の思うがままに『定義する』(define)。しかもそうした定義を構成する諸要素は，その個人が所属する社会の社会構造から拘束を受けないものとされている」(Lewis, 1976＝1992, p.148)。

すなわち，この批判でルイスがとりわけ強調することは，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，個人は社会化（socialization）されることがない，つまり社会によって形成されることがない存在と捉えられている，ということである（Lewis, 1976＝1992, p.148, p.149)。ルイスが，一方でデューイの人間観を指し，他方でブルーマーの人間観を指して言う「ジャングルに棲む社会化されざる利己的人間」(an unsocialized calculating man of jungle）という表現が，そのことを端的に示している（Lewis, 1976＝1992, p.148)。この点が，ルイスによるシンボリック相互作用論（なかでもとりわけ，ブルーマーのシンボリック相互作用論）に対する批判の枢要点であったといって良い。ルイスは自らの論考を以下のように結論づけている。

「シンボリック相互作用論は，社会のなかでその役割を遂行することはあっても，決して社会の所産（product）にはならないという，ジェームズやデューイの自律的個人像を支持し続けてきた」(Lewis, 1976＝1992, p.149)[11]。

以上のルイスによる主観主義批判の内容を要約するならば，それは次のようにまとめられよう。すなわち，シンボリック相互作用論，なかでもとりわけ，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，個人は社会化されない存在と見なされており，しかもそうした個人は，自らの社会的・物的環境を思うがままに解釈・定義し，そうした解釈・定義が，その個人と社会的・物的環境との関係を決定するかのごとく捉えられている。

以下，本章では，ブルーマーが，主として上述のルイスによる主観主義批判に対する反論として執筆したふたつの論文[12]を検討することで，ブルーマーのシンボリック相互作用論における「社会化」把握と，「個人と世界との関係」把握を明らかにすることにしたい。

第3節　ルイスに対する反論1）：自己相互作用と「社会化」

ブルーマーは，前述のルイスによる自己相互作用概念に関する批判に対して，以下のように反論を試みている。

「ルイスの批判は，私が行為者としての人間に関して提示した見解に関する非常に馬鹿げたカリカチュアである。というのも，この批判は次の点を無視しているからである。(1)行為者は，自らの展開途中にある行為を，他者たちの進行中の諸行為に適合させなければならないし，その結果として，必然的に，行為者は，それら他者たちの行為から制約を受けることになる。さらに(2)行為者は，自らの状況を定義するに際して，その行為者が他者たちの集団から前もって獲得した定義の諸図式（schemes of definition）によって，その定義を方向付けられている。そして(3)自らの行為を形成するに際して，行為者は，一般化された諸々の役割（generalized roles）によって〔も〕方向付けられており，彼／彼女は，その役割から自分自身に話しかけている。これら〔(1)(2)(3)〕が，私がさまざまな議論のなかで，行為者としての人間によるその人自身の行動の形成に関して詳しく述べたことのすべてである」(Blumer, 1977＝1992, p.154)。

以上のブルーマーによる反論において示された論点を補足しつつ整理すれば，それは以下のように捉えられよう（a から e は引用者)。

1）状況に対する適応としての行為（引用文中の(1))

(a) 行為者は，自らの行為を他者たちの諸行為に適合させなければならない。その意味で，行為者による「行為」とは，他者たちに対する「適応」活動のことを意味していると言える。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，「行為」とは，あくまでそれを行う個人による，環境や他者に対する「適応」活動のことを意味しているのであって，個人による他者や既存の社会に対する反抗や対抗を目的としてなされているもの（船津，1976年，1－30頁；田中，1971年，331頁），と捉えられているわけではない。なお，ここで適応活動とは，決して環境に対する順応を意味するものではない，ということをあわせて指摘しておきたい。ブルーマーは，別の文献において，「適応」(adjust,fit)を，環境に対する順応としてではなく，　その環境の「理解」(understanding) と「コントロール」(control) ないしは「問題解決活動」(recurring difficulties) と捉えている (Blumer, 1931；1980, pp.415-416)[13]。ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「行為」とは「適応」活動のことを意味している。この点に関してブルーマーは，1969年以前の文献においても，行為者が，他者たちの諸行為によって形成されつつある状況に，自らの解釈枠組みが適合しているかどうか，さらには，そうした解釈枠組みに沿ってなされている自らの活動も，その状況に適合しているかどうか，絶えず判断しなければならない存在であることを論じている (Blumer, 1966＝1969a, p.66＝1991年，85頁)。

2）適応における諸感情の抑制

(b) その際行為者は，他者たちの行為から制約を受けることになる。というのも，行為者による行為が，他者たちに対する「適応」活動である限り，そうした行為は，その行為者による勝手気ままな活動であってはならないからである。この点に関してブルーマーは，1969年以前の文献において，行為者は，他者に対して行為を行うに際しては，自らの感情を調整（ないしは抑制）しなければならない存在であることを認め

ている。その点について，ブルーマーは以下のように述べている。

「・・・・人間の相互作用のひとつの側面を指摘しておこう。すなわち，参与者たちは，必然的に，自己の行為への性向（tendency to act）のいくつかを抑制する必要にかられる，ということである。個々人は，自分の好み（inclinations），衝動（impulses），望み（wishes），そして感情（feelings）などを，自分が何を考慮に入れ，それをどのように判断ないしは解釈するか，ということに照らして，抑制しなければならないことになる」（Blumer，1953＝1969a，p.111＝1991年，144-145頁）。

さらに，「もし誰もが自分勝手に自らの性向や態度を表出していたならば，人間の社会生活は無政府状態に陥ってしまう。そこには社会学者が研究するべき如何なる人間の集団生活も存在しなくなってしまう」とも述べている（Blumer，1955＝1969a，p.97＝1991年，126頁）。

なお，こうしたブルーマーの説明からしても，かつてメルツァーらが特徴づけた，衝動によって引き起こされる人間の行為，というブルーマーのシンボリック相互作用論における「行為」に対する彼らの捉え方が，妥当性を欠くことがわかる[14]。

3）状況の定義と「定義の諸図式」（引用文中の(2)）

(c)「状況の定義」とは，「個人が自分自身のおかれた状況を知覚し，その意味を解釈すること」を意味している（濱嶋，1982年，189頁）。行為者は，その他者たち（の諸行為）に対して行為を行うに先立って，その状況を定義しなければならないが，そうした定義は「定義の諸図式」（schemes of definition）によって方向付けられている。後に見るように（次節），「定義の諸図式」とは，ブルーマーにおいては，「パースペクティブ」（perspective）（ものの見方）と同義の概念として扱われている。

(d) そうした定義の諸図式は，その行為者が他者たちの集団より前もって獲得しているものである。

4）自己相互作用と「一般化された諸々の役割」（引用文中の(3)）

(e) さらに，行為者による，そうした定義の諸図式を活用した状況の定義，ならびにその結果としての行為形成に際しては，その行為者は，「一般化された諸々の役割」（generalized roles）によっても方向付けられている。では，「一般化された諸々の役割」とは如何なるものを指しているのか。そのことについて，以下，詳しく論じておくことにしよう。

この言明は，ブルーマーの自己相互作用概念と密接なかかわりを持っている。そこで，彼の自己相互作用概念について，ここで再度詳しく論じておくこととしよう。

ブルーマーによれば，人間は，「自己」（self）を有することによってのみ，「自己相互作用」を行うことが（すなわち，事柄の意味を「解釈の過程」を通じて処理し，「意味付与」を行うことが）出来るようになる。換言するならば，人間が自己相互作用を行うためには，それに先だって人間は，まず自己を有していなければならないことになる（Blumer，1969b，p.12＝1991年，15頁）。

では，そもそも人間が「自己」を持つとは，如何なる事態を意味するのであろうか。ブルーマーによれば，「このことが意味しているのは，人間は自分自身の行為にとってのひとつの対象となり得る，ということに過ぎない」（Blumer，1969b，p.12＝1991年，15頁）。では，如何にし

て人間は，自分自身を自らの行為にとっての「対象」(object) とし得るのであろうか。ここで先に議論した，シンボリック相互作用論の第二の基本的前提を想起されたい。そこでは，ある個人にとっての対象とは，その個人と相互作用を行っている他者たちが，その個人の面前で，対象となる事柄に対して行う行為のやり方から生じるものとされていた。ブルーマーにおいては，ある個人にとっての自分自身という対象もまた，同様の形式で生じるものと捉えられる。そのことについてブルーマーは次のように述べている。

「ひとつの対象としての自分自身という考え方は，対象に関するこれまでの議論とも適合する。〔すなわち〕他のあらゆる対象と同様に，ある人間にとっての自分自身という対象もまた，そこにおいて他者たちが，その人間をその人自身に対して定義している社会的相互作用の過程から生じてくるものである」(Blumer, 1969b, p. 12＝1991年，16頁)。

上記の引用に見る，こうしたブルーマーによる「自己」発生論を例示するに際して，以下の引用が示唆的である。

「ある大学院生の集団が，ある社会心理学のゼミで，相互作用論のアプローチが提示する諸概念に関心を持つようになった。ある夜，ゼミのあと，そのなかのうち５人の男子学生が，その理論が提示する諸見解のいくつかについて議論をしていて，次のような状況を〔自分たちで〕作り出せるのではないかという結論に至った。すなわち，そこにおいて『他者たち』(others) がある人間に対して行う彼らの諸反応を，〔その他者たち自身が〕体系的に操作し，そうすることにより，その人間の自己観を変化させ，その結果として，その人間の振る舞いをも変化させる，そうした状況を作れはしないかという結論に至った。そこで彼らは，自分たちが議論している諸概念を検証するある実験を考えついた。彼らは被験者（かも）としてゼミに所属するある女学生を選んだ。被験者は，どう見ても，せいぜいごく平凡な女の子といった感じの子で，どこにでもいそうな女子大学院生というステレオタイプ（たいてい間違っているのだが）にぴったりあてはまるような学生であった。男子学生の計画とは，まずはじめに，仲間全員で，いっせいにその女性に対して，あたかもその女性がキャンパス一の美女であるかのごとく振る舞う，というものであった。彼らは，自分たちの目論見が彼女に気づかれないようにするために，ごく自然な振る舞いをしようということで同意した。誰が彼女と最初にデートをするか，彼らはそれをくじ引きで決めた。負けた者は，仲間から来るプレッシャーのなか，彼女をデートに誘い出さなければならない。彼は非常に不愉快と思いつつも，持ち前の演技力で『彼女は美人だ，彼女は美人だ・・・・〔中略は原著者によるもの〕』と絶えず自分に言い聞かせながら，その夜のデートをこなした。取り決めにしたがい，今度は次の学生の番となり，同様にデートが実行された。すべてのデートにおいて，彼らは，その女性に対して同様の振る舞い方をした。こうした実験が行われるなかで，数週間して早くも成果があらわれた。最初は，単に彼女が，自分の外見に気を使い始めた，というぐらいの問題であった。彼女は頻繁に自分の髪に櫛をいれ，彼女の服は以前にも増してきちんとアイロンがけがなされていた。とはいえそれからまもなくして，彼女は美容院に通い始め，ヘアスタイルを整えたり，苦労して稼いだお金を，キャンパスにおいて女性の間で流行っている最新のファッ

ションを揃えることにつぎ込み始めたりした。四番目の学生にその女性とのデートの番が回ってくる頃には，かつては出来ればやりたくなかったこのデートが，今や楽しい仕事となっていた。そしていよいよ最後の学生の番になって，彼が計画通りに彼女を誘い出した時，彼は，彼女から自分が将来のために目下猛勉強しているところだということを聞かされた〔つまりデートを断られたのである〕。彼女のまわりには，どうやら，彼ら男子学生たちのような『平凡な』大学院生よりも，もっと魅力ある男たちがいるようである」(Kinch, 1963, pp.482-483)。

上記のこの引用が示唆しているのは，「他者たち」(ここでは男子学生たち）が，その女性の面前で，その女性に関して，その女性本人に対して行い続けた行為のやり方から，その女性にとっての新たな「自分自身という対象」(＝「自己」)が形成された，という事実である。換言するならば，他者たちによるその女性に関するその女性に対する定義活動を，その彼女自身が内在化して行くプロセスを，この引用は明らかにしている (Charon, 1989, p.79)。上記の例にも見るように，まさしく自分自身という対象もまた，他者たちがその本人に関して，その本人に対して行う行為のやり方から生まれてくるもの，と捉えられる。

他者たちによるある個人に対する定義活動を，その個人が内在化させ，その個人が自分自身に対して定義活動を行う。この内在化された定義活動こそ，「自分自身との相互作用」すなわち「自己相互作用」の内実に他ならない。先に本章第１節で明らかになったように，自己相互作用とは，他者との間で執り行われている社会的相互作用を，個人の内に内在化させたものと捉えられていた。すなわち，他者との間で行う社会的相互作用を，その個人が自分自身と行うのが，自己相互作用である。上記，ブルーマーによるルイスに対する反論の (c) においては，行為者は，他者に対して行為を行う（ないしは他者と社会的相互作用を営む）に際しては，「定義の諸図式」という図式によって方向付けられていることが明らかにされた。ということは，そのような他者との相互作用が個人の内に内在化されたものとしての自分自身との相互作用（＝自己相互作用）においても，その行為者は，何らかの図式によって方向付けられているに違いないものと捉えられる。そうした自己相互作用において，その行為者を方向付けている図式が，上記の「一般化された諸々の役割」に他ならない。逆に言うならば，この「一般化された諸々の役割」なくしては，そもそもその個人は，自己相互作用を行うことすら出来ないのである。なお付言するならば，上述の (d) 同様，この図式もまた，その行為者が，前もって他者たちの集団より獲得したものであることは言うまでもない (Blumer, 1969b, pp.12-13＝1991年，16頁)。ブルーマーによれば，この「一般化された諸々の役割」とは，より具体的には，「他者がそれにより自分〔という対象〕を見たり定義したりする方法」(the way in which others see or define us) のことを意味している。この「役割」を，ブルーマーは，１）「具体的な諸個人の役割」(role of discrete individuals)，２）「具体的な組織化された諸集団の役割」(role of discrete organized groups)，３）「抽象化されたコミュニティの役割」(role of the abstract community) の三つに大別している。なお，ブルーマーは，ミードの「役割取得」(role taking) の議論をもとに，１）の「役割」を「プレイの段階」(play stage) において，２）の

「役割」を「ゲームの段階」(game stage) において，3）の「役割」を「一般化された他者」(generalized other) の段階において獲得されるとしている (Blumer, 1969b, p.13＝1991年，16頁)。すなわち，人間が，自分自身という対象を形成してゆくプロセスを時系列的に大別したものが，この三つの「段階」に他ならない[15]。

ルイスによる主観主義批判との関わりで見るならば，以上の (a) から (e) においてわれわれが注目したいのは，(c) (d) (e) である。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，行為者は，他者に対して行為（ないしは他者と相互作用）するときであれ，自分自身に対して行為（ないしは自分自身と相互作用）するときであれ，ともあれ行為（相互作用）するに際してはいつでも，その行為者が他者たちの集団より前もって獲得したこれらふたつの図式（「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」）によって方向付けられている存在と捉えられているわけである。したがって，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対する主観主義批判のうち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，個人は社会化されない存在と見なされており，しかもそのような個人は，自らの社会的・物的環境を思うがままに解釈・定義するものと見なされている，という点については，それがブルーマーのシンボリック相互作用論に対する批判としては妥当なものではないことが明らかになったと思われる。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，行為者は，自ら如上の二つの図式を獲得し，自己の社会的・物的環境に対する解釈・定義を，その図式に方向付けられる，という形で「社会化」される（というよりも自ら社会的存在となる）ものと捉えられているわけである。とはいえ，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，行為者によるそうした解釈・定義が，その個人と社会的・物的環境との関係を決定するかのごとく捉えられている，とする批判に対しては十分な回答を提示し得たとは言いがたい。そこで次節では，従来のわが国におけるブルーマーのシンボリック相互作用論に関する諸研究においては，その分析枠組みに対して持つ重要性が看過されてきたと思われる「語り返し」(talk back) 概念[16]に目を向け，この後者の批判の妥当性の如何を問うこととしたい。

第４節　ルイスに対する反論２）：自己相互作用と「語り返し」

先に本章第１節で確認したように，ブルーマーの三つの基本的前提を検討する限り，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「個人と世界との関係」は，個人の自己相互作用を通じた解釈・定義によって定められるものと捉えられていた。とはいえ，ブルーマーにおいては，そうした解釈・定義は，「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」という，二つの図式に方向付けられる形でなされているものと捉えられていたことを忘れてはならない（本章前節での議論)。ところで，ブルーマーは他方で，同じく一個人であるはずの研究者と世界（経験的世界）との関係については，こうした立論を行ってはいない。

ブルーマーは，1969年の主著『シンボリック相互作用論』のなかで描いた，「研究者と経験的世界との関係」を，それ以降に書かれた論文 (Blumer, 1993) においてさらに洗練させ (Athens, 1993, p.159)，以下のように簡潔に要約している。

「経験的世界とは，必然的に，外的領域に存在する世界（world out there），すなわち，研究者の外側に存在する世界のことである。こうした世界が有する頑固な性格（obdurate character）ということで意味されているのは，この世界が，研究者が有するその世界に関する種々の前提や専断に対して抵抗する（resist）ことが出来るということである。この意味で，経験的世界は，科学者がそれに関して抱いている種々の主張に対して語り返しする（talk back）ことが出来ると言える。したがって，研究者は，自らが誤った前提や重大な思い違いに立脚して研究を進めていないことを確証する（insure）ために，自らの前提や専断を絶えずこの経験的世界に照らして点検し（check）なければならない」(Blumer, 1993, p.164)。

上述のブルーマーによる説明を見ると，「研究者と経験的世界との関係」は，研究者によるその世界に対する一方的な意味付け（解釈・定義）次第で決定されるものとは見なされていない。この説明によれば，確かに経験的世界は，一方で研究者による意味付けないしは解釈の適用を受けるものの，他方でそうした意味付けや適用された解釈に対して抵抗ないしは「語り返し」(talk back）するものと見なされている。しかも研究者は，そうした抵抗ないしは語り返しを手がかりとして，自らの意味付けないしは適用した解釈の妥当性の如何を知ることが出来るとしている。

すなわち，ブルーマーは，一方で，個人と世界との関係を，個人の世界に対する解釈・定義によって定められるものと捉えているのに対して，他方で，同じく一個人であるはずの研究者と世界（経験的世界）との関係については，そうした捉え方を行っていない。すなわち，研究者と世界との関係は，研究者の世界に対する解釈・定義によって一方的に定められるのではなく，研究者の世界に対する解釈・定義と，その解釈・定義に対する世界からの「語り返し」との相互作用のなかで定められるものとされている。この二つの「関係」把握の矛盾を指摘したのが，マックフェイルとレックスロートの批判であった。

マックフェイルとレックスロート（McPhail, C., and Rexroat, C.）によれば，ブルーマーが，分析枠組みの文脈において想定している「行為者と世界との関係」と，研究手法の文脈において想定している「研究者と経験的世界との関係」との間にはパラドックスが生じているという。彼らによれば，ブルーマーは，一方で研究手法の文脈においては，研究者が直面している世界，すなわち「経験的世界」(empirical world）は，研究者のその世界に対する意味付けや認識に対して「抵抗」(resist）ないしは「語り返し」(talk back）することが出来ると述べ，他方で分析枠組みの文脈においては，行為者が直面している世界，すなわち「対象」(object）からのみなる「世界」(world)（より正確には，その元となる社会的・物的環境）は，その行為者のその世界（社会的・物的環境）に対する意味付けや認識次第で，（その行為者にとっての）特性ないしは性格が決定されてしまうものと捉えられているという（McPhail and Rexroat, 1979, p.457, p.459)。

ブルーマーが描いた「研究者と経験的世界との関係」に関する知見を，ブルーマー自身が，本論前節までに見た「個人と世界との関係」に組み込んだのが，以下に述べる存在論に関する四つのテーゼに他ならない。

上述のマックフェイルらの批判と，先に見た

ルイスによる批判のふたつの批判にこたえる形で，ブルーマーは，シンボリック相互作用論の存在論的前提を以下の四つのテーゼにまとめている（Blumer, 1980, p.410)。

1）人間にとって現実の世界（world of reality）とは，『外的領域に』(out there）存在し，それは人間に対峙し（stand over against），人間のその世界への行為に対して抵抗する（resist）可能性を持っている。

2）こうした現実の世界は，人間によって知覚される（perceive）という形式においてのみ知られるようになる。

3）したがって，人間がその現実に対する知覚を発展させるにしたがって，その〔人間が把握する〕現実も変化することとなる。

4）その世界からの，その知覚に対する抵抗は，その知覚の〔妥当性の如何を確かめる〕試金石（test）となる。

まず，この四つのテーゼで問題となるのは，第三のテーゼである。ここは本来，われわれによる訳の補足を除くならば，「したがって，人間がその現実に対する知覚を発展させるにしたがって，その現実も変化することとなる」というテーゼであった。とはいえ，こうしたブルーマーのテーゼは「複数の存在論的な主張の矛盾した並置」(an inconsistent juxtaposition of ontological claims）である，とある論者は批判している（Baugh, 1990, p.59)。すなわち彼は，「知覚を変化させるに伴って変化する現実とは，人間によって経験された世界〔＝人間が把握する現実〕であって，その世界それ自体ではない」と批判している（Baugh, 1990, p.60)。つまり，ブルーマーのこの第三のテーゼには，現実そのものと，人間によって把握された現実のふたつが，明確に区別されずに混在する形で述べられている，と彼は批判しているのである。われわれも，これはブルーマーによる説明不足ではないかと推測している。すなわち，ブルーマー本来の意図としては，この第三のテーゼにおける「現実」とは，人間が把握した現実を意味していたのではないかと考えている。その論拠となるのが，ブルーマーが1979年4月17日に，I.ドイッチャー（Deutscher, Irwin）に宛てた，次の手紙の内容である（quoted in Morrione, 1988, p.8)。

「ミードは，その哲学的立場においてプラグマティストであったし，私もまたそうである。私は，自分が実在論か観念論かという二分法の何れかに押し込まれるとき，大変不快な気分になる。プラグマティズムは，実在論や観念論とは異なる第三のパースペクティブとして展開してきたものであった。伝統的な区別立ては単純なものである。実在論が断言するところによれば，世界というものは，永遠に固定化された種々の対象から構成されており，それはただ単に発見されるのを待つばかりである。他方，観念論が断言するところによれば，実在論とは異なり，世界というものは，観念という形式においてのみ存在し，それは意識の流れの中に位置づけられるものである。一方，プラグマティズムが断言するところによれば，現実の世界（real world）は『外的領域に』(out there）存在するが，そうした世界は，人間がそれを描写するそのやり方（way）を通してのみ，その人間によって知られるようになる。ここで人間とは，この世界との経験を通じて，その描写（depiction）を変化させることが出来る能力を持った存在を指す」。

この手紙において，変化するとされているの

は，その（現実の）世界そのものではなく，その世界に関するその人間の「描写」（＝人間が把握した現実）であるとされているところに注目されたい。

ブルーマーによれば，上記の四つのテーゼが意味することは，一方で，観念論（idealism）の立場とは異なり，人間によって全く知覚されないかもしれないし，知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかもしれない「現実の世界」が存在すると認めているということであり，他方で，実在論（realism）の立場とは異なり，この世界が人間にとって如何なる特性を持つのかは，その世界に本来的に備わっている（intrinsic）のではなく，それを人間が如何に知覚するか次第で決まるということを認めている，というこの二点である（Blumer, 1980, p.410）。したがって，ブルーマーにおいては，「現実の世界」というものは，一方で人々の外側に存在するもの（lodged outside of people）と見なされ，他方でそれが人間にとって如何なる特性（character, quality）を持つのかは，それがその人によって如何に知覚されるかによるものと見なされていることになる。ブルーマーは，そのことについて以下のように述べている。

「ミードがよく述べていたように，水平線上に見られている山の連なりは，〔それを見る観察者にとっては〕水平線上に存在するのであって，観察者の頭上に存在しているわけではない。さらに，この山の連なりは，それを見る人間が異なれば，その呈する現実も異なり得る。ある人にとっては，それは山の向こう側にある地域への接近を妨げる岩の障壁になり得るし，またある人によっては，太古の地球で起きた大規模な地殻のねじれのために生じた地層として見られる可能性がある。またある人によっては，貴重な鉱物の源泉として，さらには一群のエルブ〔＝鹿の一種〕の住処として見られる可能性がある。巨大な岩の障壁として見られようと，地層として見られようと，鉱物の貯蔵庫として見られようと，またエルブの住処として見られようと，その山の連なりは依然として『世界として外的領域に存在するもの』（out there in the world）なのである。とはいえ，その連なりが，それを知覚する人間にとって持つ特性（character, quality）は，それが彼らによって如何に知覚されるか次第であり，換言するならば，彼らがそれに対してどのように働きかけようとしているか次第なのである」（Blumer, 1977＝1992, pp.154-155）。

このように，ブルーマーの分析枠組みにおいては，「現実の世界」が人間にとって持つ特性とは，あくまでその人間の知覚の如何によって設定されるものと捉えられている。

ブルーマーによれば，人間の知覚活動は，ある一定の「パースペクティブ」（perspective）にしたがってなされている。「知覚」の如何は，この「パースペクティブ」次第で決まる。またここで「パースペクティブ」とは，ブルーマーにおいては，ある一定のものの見方，ないしは先に触れた「定義の諸図式」と同義であると考えて差し支えない[17]。すなわち，換言するならば，人間が現実の世界を知覚する際に用いるパースペクティブが，その世界が人間にとって有する特性の如何を定めるのだと言える。そのことについてブルーマーは，以下のように述べている。

「パースペクティブなしには，『外的領域にある』（out there）その世界は，如何なる特定の表現形式も持ち得ない。折に触れてミードが述べていたように，あらゆるパースペクティブか

ら解き放たれた外的領域にある世界は，『特性なき素材』(neutral stuff) にすぎない。パースペクティブがその世界にその表現形式や特性を与えるのである」(Blumer, 1977＝1992, p.155)。

この「パースペクティブ」という概念について，ブルーマーは三点指摘している。

まず第一に，このパースペクティブは，社会的に形成・再形成されるものである。ブルーマーによれば，「ミードはパースペクティブを，それが社会的に形成されるものと見ていた。すなわち，パースペクティブは，そこにおいて，参与者たちが互いに相手に対して種々の事柄を定義し合う社会的相互作用の過程を通じて発展するものと見ていたのである」(Blumer, 1977＝1992, p.155)。

第二に，このパースペクティブは，それがまさに，「『外的領域にある』もの」(something "out there") に向けられているが故に，「客観的」(objective) な性質を持っていると言う (Blumer, 1977＝1992, p.155)。この「客観的」というタームは，ブルーマーによれば，「パースペクティブによって言及されている事柄を，公的な吟味 (public examination) にかけることが，理論上可能であるという意味において」用いられている (Blumer, 1977＝1992, p.155)。ブルーマーによれば，「ミードが『客観性』(objectivity) を，〔人々によって〕表示されている事柄への分有された接近可能性 (shared accessibility) に求めていたことは明らかである」(Blumer, 1977＝1992, p.155)。

第三に，「これが〔上述の客観性の定義が〕ミードに，それによってパースペクティブの妥当性を確定することが出来る手段を提供した」とブルーマーは述べている (Blumer, 1977＝1992, p.155)。この言説が意味することは，誰しもその表示されている事柄を吟味し，その事柄が，実際にある特定のパースペクティブを持つ者（ないしは者たち）によって主張されているような性格ないしは特性を，本当に持っているのかどうかを確かめることが出来るということである (Blumer, 1977＝1992, p.155)。

ブルーマーによれば，ある一定のパースペクティブにしたがって知覚された現実の世界のある一定の部分が，その人間にとっての「対象」(object) に相当する (Blumer, 1977＝1992, p.154)。すなわち，先の山の連なりの例において述べられた巨大な岩の障壁，地層，鉱物の貯蔵庫，エルブの住処の各々は，人間がある一定のパースペクティブにより切り取った「対象」なのである（それ故，ブルーマーのシンボリック相互作用論において「意味」(meaning) とは，ある一定のパースペクティブによって，ある個人に捉えられた，現実の世界のある一定の部分の現れ方であると言える）。換言するならば，「知覚」するとは，その人間が自らにとっての「対象」を形成する営みに他ならず（すなわち「意味付与」の行程を意味し），その結果として，その人間にとっての「世界」(world) が形づくられることは，もはや言うまでもない。また先の山の連なりの例にも述べられていたように，そこで形成される「対象」の如何によって，その人間の「対象」（となる現実の世界のある一定の部分）に対する行為の様式が定められることとなる。

以上ここまでの議論を要約するならば，それは次のように捉えられよう。すなわち，人間とは，一方で「現実の世界」(「事柄」(thing) からなる領域）に取り囲まれた存在である。とはいえ，他方で人間は，そうした世界（のある一定の部分）を，ある一定のパースペクティブに

より切り取り，その結果として形成した「対象」からのみなる「世界」(world) のなかに住んでいる存在でもある，と[18]。

人間は，いわば「特性なき素材」としての現実の世界を加工し，そこから自分自身にとっての「対象」なり「世界」(world) を形成する。とはいえ，先に山の連なりの例においても述べられていたように，人間によってある一定の「対象」や「世界」として加工されようとも，他方で現実の世界は，依然として「世界として外的領域に存在するもの」であり続ける。以下では，この言明が含意する内容について検討して行くこととしよう。

先のシンボリック相互作用論の存在論に関する四つのテーゼにも述べられていたように，人間は自らを取り巻く現実の世界を「知覚」することによってしか知ることが出来ない。したがって，何かを知るとは，その何かを「対象」として加工することを意味することになる。換言するならば，知るとは，ある一定のパースペクティブによって，その何かを色づけ加工することを意味していることとなる。逆に言うならば，それ故人間には，あらゆるパースペクティブから解き放たれた現実の世界それ自体のありのままの姿（=「特性なき素材」）を把握することなど不可能なことと捉えられなければならないこととなる。この点について，先にわれわれは，ブルーマーの見解を以下のように要約しておいた。

「人間は，如何に努力しようとも，自らを取り巻く世界・・・・に関して，徹頭徹尾主観を排して，そのありのままの姿を知ることなど決して出来ない。なぜなら，人間はそうした世界を，ある一定の『パースペクティブ』(perspective) を通してしか見ることができず，それゆえ，必然的に，人間に知られる世界とは，その人のパースペクティブによって色づけられ切り取られたものとなってしまうからである。したがって，人間が把握する世界とは，あくまで，それを見る人間が，自らのパースペクティブ，ないしは認識枠組によって捉えた，そうした世界の一側面にすぎず・・・・，決してその世界全体のありのままの姿・・・・ではあり得ないのである」(桑原，1998年，153頁)[19]。

以上のように，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，人間にとって，現実の世界とは，決してそのありのままの姿を把握し得ない存在と捉えられている。それ故にであろう，ブルーマーも言うように，現実の世界には，いつでも「人間によって全く知覚されないかもしれないし，知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかもしれない」という性質がつきまとい続けることとなる。

では，人間は，自分自身の知覚の妥当性の如何をどのようにして知ることが出来るのであろうか。先に存在論に関する四つのテーゼにおいては，人間による知覚の試金石として，現実の世界からの「抵抗」(resist) ないしは「語り返し」(talk back) が挙げられていた。現実の世界には，人間の知覚に対して，より正確には，その知覚に基づいた人間の行為に対して，抵抗するという性質がある。また人間はそうした抵抗を試金石として，自分自身の知覚の妥当性の如何を確証することが出来る。このようにブルーマーは述べていた。

では，ブルーマーの言う「抵抗」ないしは「語り返し」とは一体何を意味するのであろうか。われわれの理解では，人間のある一定の認識に対する「例外的実例」(exceptional instance) の発生を意味している。ブルーマーは，ミードの知見を援用し[20]，以下のように述べている。

「ミードにとって『普遍的なるもの』(universal) とは，共通の意味 (common meaning)，すなわち，人々が何かを表示する際に，その人々によって分有されているものを指している。したがって，如何なる対象であっても，それが共通の意味を持つ場合・・・・その対象は『普遍的なるもの』を構成する。・・・・山の連なりの例を持ってくるならば，〔先の〕四つの表示 (岩の障壁，地層，鉱物の宝庫，エルブの住処) の各々が『普遍的なるもの』を構成している。こうした簡単な例示に照らした場合，『普遍的なるもの』は，如何なる意味においても，科学者集団のパースペクティブをそれ以外の集団のパースペクティブから区別しはしない。したがって，その山の連なりはエルブの住処であるという主張は，それが地層であるという主張と同様に『普遍的なるもの』を構成する。・・・・『例外的実例』とは，既存の普遍的なるものの外側に位置するものであり，それはその普遍的なるものに挑み，その普遍的なるものを作り直すための手段を提供するもの〔であった〕・・・・『例外的実例』がもつこうした役割を理解することなしに，ミードが如何なる意味において，普遍的なるものと現実との関係を取り扱っていたかに関して，有意義な説明をすることは出来ない」(Blumer, 1977＝1992, p.156)。

マリオーネによれば，この「例外的実例」という概念は，ブルーマーの分析枠組みにおいては，既存の「普遍的なるもの」(＝「一般化」(generalization)) に対する「否定的実例」(negative case) と同義で用いられ，それは，人間が有する既存の一般化を洗練・改良するために，その人間によって利用される手段と捉えられている[21]。事実マリオーネによるこうした説明は，上述のブルーマーからの引用によって裏付けられていると言える。

ブルーマーは，その後の論考において，この「例外的実例」の内実を，ある行為者に対する「新たな事柄」(new thing) の出現と，既存の事柄に対して「新たな解釈を適用する個人」(individual applying new interpretation) の出現の二種類に大別している (Blumer, 1993, p.171)。この二つの「例外的実例」を例示する素材として，学説研究という営みを例に取ってみよう。たとえば，ブルーマーを研究しているある社会学者が，それまで，その研究領域においては発見されていなかったブルーマーの未公刊資料を発掘し，それを学会に報告したとする。この場合，その未公刊資料の存在は，学会（学界）にとっての「新たな事柄」の出現となる。他方で，その領域において，それまで「彼の主著『シンボリック相互作用論』を読む限り，彼は主観主義者である」と捉えられてきた『シンボリック相互作用論』というその文献に対して，ある別の学者が，同一の文献を「このように解釈すれば，ブルーマーは主観主義者であるとは言えない」とする説を打ち出したとする。この場合，その学者の存在は，その学会（学界）において，既存の事柄に対して「新たな解釈を適用する個人」の出現となる。

以上，本節における，ここまでの議論で，ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組みにおいては，個人による解釈・定義が，その個人とその社会的・物的環境との関係を決定するかのごとく考えられている，とするルイス批判の後半部の指摘が，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対する批判として妥当でないことが明らかにされたと思われる。すなわち，人間は，自らの社会的・物的環境を解釈・定義し，

その社会的・物的環境との間に，ある一定の関係を取り結ぶものの，そうした関係はそこで決定されるものと見なされているわけではない。というのも，人間によって解釈・定義される社会的・物的環境とは，「現実の世界」であり，それ故それは，いつでもそうした解釈や定義に「抵抗」ないしは「語り返し」する（=「例外的実例」を呈示する）可能性がある，という性質を持っているからである。では，何故にいつでもなのであろうか。何故なら，人間が対峙している社会的・物的環境，すなわち現実の世界とは，その人間がそれを如何なる「対象」に作り替えようとも，依然として「世界として外的領域に存在するもの」(out there in the world) であり続けるからであり，それ故，人間がそれを如何に正確に知覚しようとしても，「全く知覚されないかも知れないし」，「知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかも知れない」という性質を持ち続けるからである。またまさに，こうした「抵抗」ないしは「語り返し」を契機として，人間は自らの解釈や定義の妥当性の如何を知ることが出来[22]，既存の解釈や定義を洗練・改良することになる。またその結果として，必然的に，人間と社会的・物的環境との関係は再構成されることになる。

本節で焦点を当てた「抵抗」ないしは「語り返し」という知見は，ブルーマーに対して寄せられてきた主観主義批判を論駁する上で，非常に重要な知見であると思われる。たとえば前出のマリオーネも，この知見を援用して，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して寄せられてきた主観主義批判を論駁しようとしている。マリオーネは，ブルーマーを「ミードの主観主義的解釈者」(subjectivistic interpreter of Mead) と批判するワーシェイら (Warshay and Warshay, 1986) に対して，上述の「抵抗」概念を用いて以下のように反論している。

マリオーネによれば，ブルーマーはミード同様に観念論者（=主観主義者）ではない。ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「状況」(situation) とは，「二重の特性」(dual character) をもつものと捉えられている。すなわち，ブルーマーにおいて「状況」とは，行為者によって定義される一方で，そうした定義から離れて存在し (exist apart)，その行為者に「抵抗する」(resist) ことが出来る存在と捉えられている。マリオーネは，このようにブルーマーの立場を説明した上で，「ブルーマーを『主観主義者』と呼ぶ者 (Warshay and Warshay, 1986) は上述の点を無視している」とワーシェイらを糾弾している (Morrione, 1988, p.7)。

以上の議論からもわかるように，「抵抗」ないしは「語り返し」という知見は，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して寄せられてきた主観主義批判を論駁する上で，非常に重要な知見であると言えよう[23]。

第5節　自己相互作用と行為

1）構成・再構成されるものとしての個人と世界との関係

以上，ここまでの議論より得た知見を整理することにしよう。

まず前提として，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，人間と社会的・物的環境との関係は，その人間による解釈・定義を通じて定められるものと捉えられていた。また，シンボリック相互作用論の第一の基本的前提を踏まえるならば，そこでなされた解釈・定義（「意味」）に基づいて，人間はその環境に対し

て行為するのであり，逆に言うならば，そうした解釈・定義によって，その人間の環境に対する行為のやり方が定められることとなる。またその行為とは，言うなれば，それを行う人間が，自分自身が対峙している環境に対して行う「適応」活動に他ならないということは，ブルーマーのルイスに対する反論を検討するなかで明らかにされた。なお付言するならば，そうした人間による解釈や定義という営みは，フリーハンドになされているものではなく，その人間が，他者たちの集団から前もって獲得した「定義の諸図式」（=「パースペクティブ」）に沿ってなされている，とブルーマーにおいては捉えられていた[24)]。なお，シンボリック相互作用論の第三の基本的前提を踏まえるならば，そうした定義の諸図式は，その人間が執り行う「自己相互作用」ないしは「自分自身との相互作用」を通じて，操作されたり修正されたりするわけであるが，そうした自己相互作用という営みもまた，ルイスに対するブルーマーの反論のなかで見たように，ブルーマーにおいては，その人間が同じく他者たちの集団より前もって獲得した「一般化された諸々の役割」という図式に方向付けられる形で行われているものと捉えられていた。では，如何なる形式により，それらふたつの図式が個人に獲得されるのであろうか。それを説明するのが，シンボリック相互作用論の第二の基本的前提に他ならない。そこでは，ある個人にとっての「対象」(object) とは，その個人が相互作用を行っている他者たちが，その個人に対して，その対象となる「事柄」(thing) との関連において行為する，そのやり方から生じるものとされていた。「対象」とは，人間が，「パースペクティブ」（=「定義の諸図式」）にしたがって知覚したものである，とブルーマーがルイスに対する反論のなかで述べていたことを考慮に入れるならば，ある個人にとっての「対象」が生じるということは，その個人が「対象」（となる事柄）を知覚するための「定義の諸図式」を手に入れることと等価なことであると考えても間違いではないであろう。ブルーマーにおいては，自分自身という「対象」もまた，同様の形式において形成される，とされていたことを考慮に入れるならば，「一般化された諸々の役割」という図式の獲得メカニズムもまた，上記の定義の諸図式の獲得メカニズムと同様に，シンボリック相互作用論の第二の基本的前提により説明され得るものと捉えられる。すなわち，「一般化された諸々の役割」という図式もまた，自分自身という「対象」を形成するための，「パースペクティブ」（ものの見方）のひとつに他ならないのである。

いわば人間は，こうしたふたつの図式に方向付けられる形で，その社会的・物的環境を解釈・定義し，その結果として，その環境との間にある一定の関係を取り結ぶ。これが，ブルーマーにおける自己相互作用を通じた「意味付与」という営みに他ならない。とはいえ，そうした関係は不動のものとしてそこで永遠に確定されるわけではない。というのも，人間が直面している社会的・物的環境とは，人間によって解釈・定義される一方で（すなわち「対象」からのみなる「世界」(world) として形成される一方で），そうした人間による解釈や定義に対して，いつでも「語り返し」する可能性を持った「現実の世界」でもあったからである。人間はそうした語り返しを契機として，自らの解釈・定義の妥当性の如何を知ることになり，その結果として既存の解釈や定義を修正することになる。またその結果として，その人間と社会的・物的環境

との関係は再構成されることとなる。これが本章前節までの議論より得られた知見の概要である。

以上の議論より次のことが結論づけられる。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組みにおいては，人間と社会的・物的環境との関係は，人間による環境に対する解釈・定義（自己相互作用を通じた環境に対する意味付与）と，環境からそうした解釈・定義に対して発せられる語り返しとの絶え間ない相互作用のなかで構成・再構成されるものと捉えられていることとなる[25)]。

2）構成・再構成されるものとしての行為

以上明らかにされた，人間と社会的・物的環境との絶え間ない相互作用の内実を踏まえた上で，では「行為」(act, action) とは，如何なるものと捉えられるのか。以下，そのことについて議論したい。このことを解明する上で，ブルーマーが後の論考 (Blumer, 1993) において提示した，ミードの「個人的行為」(individual act) に関する説明が示唆的である。

ブルーマーによれば，ミードは，人間の個人的行為の分析に際して，その基礎的な四つの段階を明らかにしたという。それは「衝動 (impulse)，知覚 (perception)，操作 (manipulation)，そして完結 (consumation)」の四つである (Blumer, 1993, p.188)。

まず「衝動」の段階とは，個人的行為の最初の段階であり，それは「触発された有機体〔＝人間行為者〕の行為しようとする傾向」ないしは，ある刺激によって触発された行為者の精神的作用という形態において出現する。ブルーマーによれば，この衝動によって，行為者は，その衝動を「充足させようとする」行為へと送り出される (launch) のだと言う。この段階を通じて，行為者は，自らを「環境」(つまり「現実の世界」) に直面させることになる。ブルーマーによれば，「この衝動が，有機体を，自らの環境に対処しなければならないような状況に位置づける」(Blumer, 1993, p.189)。

行為者による個人的行為は，まず「衝動」によって引き起こされる。とはいえ，行為者による行為が，この「衝動」によってのみ説明されるものと，ブルーマーは捉えているわけではない。人間の行為の決定因ないし「原因」(cause) を，内的刺激か外的刺激かのいずれかに帰属させようとする二分法的な考え方を斥けるブルーマーが[26)]，個人的行為の第二段階として挙げているのが，「知覚」のステージである。

ブルーマーによれば，次に「知覚」の段階とは，先の段階において行為者が直面した環境を，その行為者が，自らにとっての「対象」(object) とする過程を指す。ブルーマーの「自己相互作用」の過程ないしは「解釈の過程」に関する議論に照らし合わせるならば，この段階は，その過程を構成する「表示」(indication) と「解釈」(interpretation) のうち，「表示」の過程に相当する。ブルーマーによれば，「知覚とは積極的 (active) なものであり，前もって確立されている対象を単に引き写す，という消極的なものではない。したがって，知覚対象 (percept) とは，その有機体自身によって〔環境から〕切り取られた (cut out) ものである・・・・知覚に従事しているとき，行為者は，前述の対象を形成ないしは切り取っているのである。行為者はこのことを自己表示の過程を通じて行っている」(Blumer, 1993, p.189)。また，ここでの知覚のされ方如何によって，行為者が以後行う行為の方向ないしは目標が暫定的に定められることと

なる（Blumer, 1993, p.189)。

次に来る第三の段階が「操作」である。ブルーマーによれば，この段階において，先の知覚の段階において形成された「対象」の「意味」(meaning) が操作される。ブルーマーは明言こそしていないものの，この段階が，「解釈の過程」を構成する「表示」と「解釈」のうち，後者の「解釈」の過程に相当することは言うまでもない。またさらに注目しなければならないことは，この過程が純粋に内的な過程ではない，ということがこの論文において示唆されているということである。すなわち，「対象」の「意味」を操作するに際して，行為者は，その「対象」に対して，外的にも働きかけ，その働きかけの結果として，その「対象」から受けた反作用 (reaction) をもとに，行為者はその「対象」の「意味」を操作する，とブルーマーは述べている（Blumer, 1993, p.189)。ブルーマーによれば，この操作の段階を通じて，「知覚の段階において行為者によって形成された対象の意味が検証され (confirm)，そしてもし必要とあらば，行為者がその後の行為をすすめるなかで，その行為者によって改訂される (revised) ことになる」という (Blumer, 1993, p.189)。すなわち，より正確に言うならば，この段階には，１）自己相互作用を構成する「表示」と「解釈」のうち，後者の「解釈」の過程と，２）行為者の解釈・定義に対する「語り返し」の発現と，３）「語り返し」を契機とした行為者による解釈・定義の検証という，三つのプロセスが含まれていることになる。言うまでもなく，その語り返しに相当するのが，上記の「反作用」に他ならない。

個人的行為の最後の段階は「完結」である。この段階は，ブルーマーによれば，「行為者の〔一連の〕行為の完遂によって特徴づけられ，この段階は，個人が最初の段階〔『衝動』の段階〕において抱いていた衝動を充足させる」(Blumer, 1993, p.189)。もし行為者の衝動が充足されれば，行為者はその「対象」に対してある一定の「価値」(value) を付与することになる[27]。

以上の四つの行程より，一人の人間の行為が構成されていると，ブルーマーは捉えている (Blumer, 1993, pp.188-189)。こうした意味で，船津も言うように，ブルーマーのシンボリック相互作用論において「行為」(act, action) とは，まさしく，それを行う行為者による構成の所産 (construction) なのであって，その行為者に作用するとされる外的・内的な刺激の単なる表出物ではない（船津，1993年，53-54頁)。

なお，先に明らかにされた「人間と社会的・物的環境との関係」ないしは「個人と世界との関係」を踏まえるならば，この四つの行程から構成される「行為」とは，絶えざる再形成を余儀なくされるものと捉えられなければならない。すなわち，上記に提示された「行為」の四つの行程は，「衝動」１）→・・・・→「完結」１）で終わるものと捉えられるべきではなく，「衝動」１）→・・・・→「完結」１）→「衝動」２）→・・・・→「完結」２）→「衝動」３）→・・・・→「衝動」n）→・・・・と，終わりなく継続してゆくものと捉えられなければならない。

こうした「個人的行為」が，複数の人間の間で取り交わされている場合，それは「相互作用」(interaction) ないしは「社会的相互作用」(social interaction) と呼ばれ，ブルーマーはそれを「シンボリックな相互作用」(symbolic interaction) と「非シンボリック相互作用」(non-

symbolic interaction）という，ふたつのレベルに大別している。さらにこの相互作用が人間間の「相互適応」(mutual adjustment）という形を取るとき，それは「ジョイント・アクション」(joint action）と呼ばれ，ブルーマーにおいては，そうしたジョイント・アクションから「人間の社会」(human society）は構成されている，と捉えられている。その詳細な検討については，次章に譲ることとしたい。

第２章　相互作用から社会へ――形成されるものとしての社会――

第１節　「社会はいかにして可能か」

「シンボリック相互作用論は，シンボルを通じての人間の相互作用過程に焦点をおき，人間の社会による形成と社会の人間による形成という問題，つまり，人間と社会との関係についての基本的問題を明らかにしようとするものである」(船津，1976年，１頁)。

これは，船津　衛がその著『シンボリック相互作用論』の冒頭において，シンボリック相互作用論の思想を特徴づける最大公約数として提示した見解である。

断るまでもなく，個人と社会との関係を如何に把握するか，という問題は，社会学が誕生して以来，暗黙にであれ，明示的にであれ，その解明されるべき根本問題として位置づけられてきた[1)]。とはいえ，まさにこの「個人と社会との関係」を如何に捉えるかに関して，「過度の分極化の傾向」が，今日までの社会学史に存在してきたこともまた事実である（山崎，1993年，65頁)。すなわち，一方に「過度に個人主義的な社会学的営み」を押し進めるものと，他方に「過度に社会（中心）主義的な社会学的営み」を押し進めるものという，ふたつの傾向が存在してきた。たとえば，H.スペンサーの功利主義的個人主義に対するE.デュルケームの批判は，過度に個人主義的な人間観という問題性に向けられていたし，その後の，T.パーソンズの社会学に対するD.ロングの「社会化過剰の人間観」(the oversocialized conception of man）批判は，過度に社会（中心）主義的なものとして受けとめられた人間観という問題性に向けられたものであると言えよう（山崎，1993年，66頁)。

個人と社会との関係を如何に捉えるか，という問題をその根本問題と捉える，ということに関して言えば，上記の船津からの引用にも明らかなように，このことは，シンボリック相互作用論においても例外ではない。

かねてより，ブルーマーのシンボリック相互作用論は，上記に見た後者の批判（「社会化過剰の人間観」批判）と軌を一にしつつ，個人と社会との関係に関する新たな理論的立場を構築しようとするものと捉えられてきた。たとえば船津は，次のようにブルーマーのシンボリック相互作用論における個人と社会との関係を捉えている。すなわち，「従来の社会学」(明らかにパーソンズを中心とする構造機能主義社会学を指している）が，社会学理論における個人と社会との関係を，社会が一方的に個人を規定するという形で捉えていたのに対して[2)]，ブルーマーのシンボリック相互作用論は，個人を社会に一方的には規定されない「主体的存在」と捉え，社会を，そうした主体的存在たる個人によって形成・再形成されるものとして捉えるという形で，個人と社会との関係を捉えようとしている，と言う（船津，1976年，20頁；1993年)。

いわば，個々人による社会の形成・再形成を

強調する分析枠組みとして，ブルーマーのシンボリック相互作用論は捉えられてきたわけである。とはいえ，ブルーマーが，シンボリック相互作用論において，社会による個々人の規定の側面を看過してきたかと言えばそうではない。シンボリック相互作用論とは，あくまで「形成し形成される〔強調は引用者〕過程を相互行為の場で捉えようとする」理論であり（森岡，1993年，613頁），事実，先にも見たように，ブルーマーにおいては，個人は，当該「社会」（他者たちの集団）より，「一般化された諸々の役割」と「定義の諸図式」を獲得し，そうした図式によって自らの解釈・定義を方向付けられるという形で，自ら「社会化」(socialization)を受ける存在と捉えられていた。

社会が個々人を形成する側面については，本論第1章に論じたとおりである。では，個々人が社会を形成してゆくのは，如何なるメカニズムによるものなのか。またそもそも「社会」とは，ブルーマーのシンボリック相互作用論において如何なるものと捉えられているのか。本章はそれを明らかにすることを目的としている。

個々人が社会を形成して行くそのメカニズムや如何に。本章が解こうとするこの問題は，ブルーマー自身が，シンボリック相互作用論を展開するにあたって，その立論の背後に持っていた問でもあった。そのことを，那須は鋭く以下のように指摘している。

「彼は解釈に基づく進行中のシンボリック相互作用のなかにある社会という『ルート・イメージ』を描くことによって，あらかじめ確立された『意味』ないしは『解釈』がもはや実際に，あるいは可能性として適切に適用されえない状況，すなわち，実際的あるいは潜在的な『問題的状況』に自らの視点を定位しようとしている・・・・彼のシンボリック相互作用論は，『問題的状況』――それが社会的なものであれ個人的なものであれ――を対象として設定することを決断したパースペクティブであり，そしてそれはまた，さらに視点を広げて言えば，『社会はいかにして可能か』という問を背後にもったパースペクティブである，とひとまずは言うことができよう」（那須，1995年 b，92頁）。

では「社会はいかにして可能か」。ブルーマーの言説を検討することを通じて，以下，この問題について議論して行くこととしたい。

第2節　三つの相互作用

「シンボリックな相互作用としての社会」(society as symbolic interaction) (Blumer, 1962)という，ブルーマーのよく知られた表現からも明らかなように，ブルーマーにおいて「社会」とは，まず何よりも「社会的相互作用」(social interaction) の範疇に入るものと捉えられている。そこでまず，本節では，彼の社会的相互作用把握を検討することから始めることにしたい。

周知のようにブルーマーは，人間間に生じる「社会的相互作用」(social interaction) をふたつのレベルで捉え，そのうちのひとつを「非シンボリック相互作用」(non-symbolic interaction) と名付け，もうひとつを「シンボリックな相互作用」(symbolic interation) と呼んでいる。その各々の相互作用の内実を，ブルーマーは，ミードの知見を援用し，以下のように表現している。

「・・・・ミードは，人間の社会において生じている社会的相互作用がふたつの形態ないしはレベルにあるものと見ている。ミードは，そうした相互作用を，それぞれ，『身振り会話』(the conversation of gestures)，『有意味シンボル

の使用』(the use of significant symbols) と呼んでいる。このそれぞれを,『非シンボリック相互作用』(non-symbolic interaction),『シンボリックな相互作用』(symbolic interaction) と私は名付けたい。非シンボリック相互作用が，個人が他者の行為に対して，それを解釈することなく直接的に反応するときに生じるものであるのに対して，シンボリックな相互作用には，そうした他者の行為の解釈が含まれている・・・・」(Blumer, 1969b, p.8＝1991年，10頁)。

この説明を見る限り，ブルーマーは，人間間の社会的相互作用を，確かにふたつのレベルにおいて生じるものと捉えている。そこにおいて個々人が他者の行為を解釈することなく，互いに相手に対して刺激－反応的に反応し合う「非シンボリック相互作用」がまずひとつ提示されている[3]。ブルーマーによれば，相手の一撃をかわすために自動的に腕を上げるボクサーの場合などのような反射的な反応が，その典型例として挙げられる (Blumer, 1969b, p.8＝1991年，10頁)。そしてもうひとつには，そこにおいて個々人が互いの行為を解釈し合い，そうした解釈に基づいて反応しあう「シンボリックな相互作用」が提示されている。そして，この後者の相互作用が，ミードの言う「有意味シンボルの使用」に相当する，とブルーマーは捉えている。

とはいえ，もしブルーマーにおいて「有意味シンボル」なるものが「共通の定義」と同義で用いられているのであれば[4]，上記の「シンボリックな相互作用」＝「有意味シンボルの使用」というブルーマーの立論には，問題が生じる。

ブルーマーは，「対象」(object) に関する議論において，「ひとつの対象が異なる個人に対して異なる意味を持つことがあり得る」(Blumer, 1969b, p.11＝1991年，13頁) と述べ，それ故，「個人や集団は，たとえ同一の空間的な位置を占有し，そこで生活していたとしても，きわめて異なった環境を持っている可能性がある。いわば，人々は，たとえ隣り合って住んでいたとしても，異なった世界に住んでいることがあり得る」(Blumer, 1969b, p.11＝1991年，14頁)としている。すなわち，本論における前章の議論を踏まえた上で，このブルーマーの言説を解釈するならば，相互作用に参与するであろう個々人は，互いに相手とは異なった「パースペクティブ」を持つという意味で異質な存在として，社会的相互作用に参与する可能性が高いということになる[5]。その上で，ブルーマーのシンボリック相互作用論の立場から，相互作用に参与する両者の間に共通の定義（＝有意味シンボル）は如何にして成立し得るか，という問題を立て，そうした問に対して，共通の定義とはまさしくシンボリックな相互作用を通じて形成されるとこたえるのであれば[6]，上記のブルーマーによる「シンボリックな相互作用」＝「有意味シンボルの使用」という立論からは，一種の循環論に陥った説明しか生まれない。すなわち，有意味シンボルの成立は有意味シンボルを使用することによって可能となる，と説明せざるを得なくなってしまう[7]。

確かに，「シンボリックな相互作用」に「有意味シンボルの使用」が含まれているのは事実であろう。とはいえ，両者は同一のものではない。前者には，異質な個々人が未だ共通の定義（有意味シンボル）を成立させてはいないものの，互いの行為を解釈し合い，共通の定義ないしは有意味シンボルを成立させようとする「シンボリックな相互作用」が含まれているはずである。すなわち，ブルーマーにおける「社会的相互作用」概念には，正確には三つの「相互作

用」が含まれていなければならないわけである。すなわち，1）「非シンボリック相互作用」，2）未だ有意味シンボルが成立していない「シンボリックな相互作用」，そして3）「有意味シンボルの使用」と同義なものとしての「シンボリックな相互作用」，という三つの相互作用が含まれていなければならないわけである。

ブルーマーの「シンボリックな相互作用」概念には，正確には，二つのシンボリックな相互作用が含まれている。そして彼が主たる分析の対象としたのも，非シンボリック相互作用ではなく，このシンボリックな相互作用に他ならない[8)]。

ブルーマーによれば，シンボリックな相互作用とは，そこにおいて「人々が互いの身振りを解釈し，そうした解釈によって生み出された意味に基づいて行為」(Blumer,1966＝1969a,pp.65-66＝1991年，84頁)している社会的相互作用を指す。シンボリック相互作用論の基本的前提のうち，第三の基本的前提，すなわち，「事柄の意味は，その人間が，自分が出くわした事柄に対処する際に用いる解釈の過程（interpretative process）を通じて，操作されたり修正されたりする」という前提を踏まえるならば，そうした「解釈」は，その個人の「自己相互作用」ないしは「解釈の過程」を通じて行われているのであり，またその第一の基本的前提，すなわち，「人間は，事柄（thing）に対して，その事柄が自分にとって持つ意味（meaning）に基づいて行為する」という前提を踏まえるならば，その結果として付与した「意味」に基づいて，その個々人は，互いに相手に対して行為を行うことになる。なお，こうした相互作用を，ブルーマーが，「他者の行為や言及の意味を確定」する「解釈」(interpretation）と，「他者が如何に行為するべきかに関する表示を，他者に伝達」する「定義」(definition）から構成されているもの[9)]と捉えていることからも分かるように，この「身振り」(gesture）は，それが向けられる個人に対して，その個人がどのように行為するべきかを指示する機能を持っている。そうした身振りを媒介として，人々は相互作用を行っている。とはいえ，その相互作用において，その身振りが，それが向けられた個人によって「解釈」され，またその結果としてそれに「意味」が付与されるが故に，この相互作用は「身振り会話」とは呼ばれずに，「シンボリックな相互作用」と呼ばれることになる。

次節では，本節で明らかにされた「相互作用」観を踏まえた上で，ブルーマーにおいて「社会」とは，如何なるものと把握されているのか，またその「社会」が如何なるメカニズムによって形成されるものと捉えられているのか，その内実を明らかにすることにしたい。

第3節　相互作用から社会へ——ジョイント・アクションとしての社会——

ブルーマーのシンボリック相互作用論において，社会とは如何なるものと把握されているのか。そこから議論を始めなければならないであろう。

ブルーマーにとって，「社会」とは，まず何よりも，個々人が行う行為の観点から概念化されるものであった。ブルーマーも言うように，シンボリック相互作用論の立場からするならば，「根本的に（fundamentally），人間集団ないし社会とは，行為のなかに存在する（*exist in action*）ものであり，そうした行為の観点から把握されなければならない」(Blumer, 1969b, p.6＝1991年，8頁）ものと捉えられる。換言するならば，

人間集団（human group）ないし社会（society）を，「進行中の活動の複合体」(complex of ongoing activity)（Blumer, 1969b, p.6＝1991年，8頁）からなるものと捉えるのが，ブルーマーのシンボリック相互作用論の「社会」に対するアプローチに他ならない。

さて，この「進行中の活動の複合体」こそ，以下本章で議論の焦点となる「ジョイント・アクション」(joint action) に他ならず，ブルーマーは，人間の社会を，このジョイント・アクションからなるものと捉えている。以下の説明を見れば，そのことがより一層明らかとなる。

「私は『ジョイント・アクション』(joint action) という用語を，ミードの『社会的行為』(social act) を意味するものとして用いたい。ジョイント・アクションという用語で私が言及しているのは，個々別々の参与者たちの一連の諸行動を適合させ合うことにより構成される，行為の一層大きな集合的形態（the large collective form of action）のことである。こうしたジョイント・アクションの実例には，商取引，家族の晩餐，結婚式，買い物旅行，ゲーム，懇親会，討論会，裁判，戦争といったものがある。こうした事例の各々に，それがジョイント・アクションであると識別しうるそれ独自の形態（すなわち，それが参与者たちによる諸行為の接合から構成されているという形態）を見て取ることができる。ジョイント・アクションの形態は，二人の個人による単純な共同（collaboration）から巨大な組織や機関による行為の複雑な相互調整にまでわたる。人間の社会のどこを見ても，人々が種々の形態のジョイント・アクションに従事していることがわかる。実際，こうした実例の全体が，その無限の多様性と，可変的な結びつきと，複雑なネットワークとによって，ひとつの社会という生命体を構成しているのである。・・・・ミードにおいて社会的行為とは，社会の基本的単位と捉えられていた。したがってそれを分析すれば，社会というものが持つその本質的な特性が明らかになる」(Blumer, 1966＝1969a, p.70＝1991年，90頁)。

この意味でまさしく「人間の社会」(human society）とは，行為のなかに存在するものと捉えられる。なお，ブルーマーによれば，こうしたジョイント・アクションは，それを見る観察者（研究者）の視点（ないしは時系列上の位置）の如何によって，個々人が各々の行為を相互に適合させようとしている過程（社会が形成され行くプロセス）と捉えることが可能であれば，各々の行為が相互に適合し合ったもの（形成された社会）と捉えることも可能である。この点について，ブルーマーは，以下のように説明している。

「思うに，ジョイント・アクション（joint act）とは，まず何よりも行為を『組織化してゆくこと』(“organizing” action）であって，行為が『組織化されたもの』(“organization” of action）ではない。あとから振り返って見てはじめて『組織化されたもの』と見えるに過ぎない」(Blumer, 1975＝1992, p.121)。

なお，ブルーマーが，自己が依って立つ視点として採用しようとしているのは，前者のパースペクティブ，換言するならば過程としてのジョイント・アクションである（Blumer, 1975＝1992, pp.121-122)。その意味で，ブルーマーのシンボリック相互作用論は，まさしく那須も言うように，「社会はいかにして可能か」という問いを背後に持ったパースペクティブであると言えよう。

以上のブルーマーからのふたつの引用におい

て示された論点を補足しつつ整理すれば，それは以下のように捉えられよう。

1）ジョイント・アクションとは，行為の一層大きな集合的形態のことを意味する。

2）そうしたジョイント・アクションは，その形成に参与する個々人が，自らの行動ないしは行為を適合させ合うことから成り立つ。別言するならば，その形成に参与する個々人は，自己の行為を他者たちのそれに適合させなければならない。

3）ジョイント・アクションの担い手には，個人のみならず，大規模な組織や機関も含まれている。

4）したがって，ジョイント・アクションには，個々人の単純な共同から，大規模な組織や機関による行為の複雑な相互調整までが含まれる。

5）こうしたジョイント・アクションが，相互に結びつき合ったものが，ひとつの社会に他ならない。この点についてブルーマーは，別の箇所でも以下のように述べている。

「ミードの図式にしたがうならば，社会とは，それが静態的なものであろうと動態的なものであろうと，また如何なる均衡状態を保っていたとしても，ひとつのシステムとしてではなく，刻々と生起する無数のジョイント・アクションからなるものと捉えられる」（Blumer, 1966＝1969a, p.75＝1991年，97頁）。

6）したがって，ジョイント・アクションは，社会の基本的単位であり，それを分析すれば，社会というものが持つその本質的な特性が明らかにされる。

7）別言するならば，社会の特性の如何は，それを構成するジョイント・アクションの特性次第で決定されると言えよう。

8）そうしたジョイント・アクションは，あくまで過程という観点から捉えられなければならない。

ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，社会とは，無数のジョイント・アクションの相互連結から形づくられているものと捉えられている。その意味で，ブルーマーにおいて「社会」とは，まさしくジョイント・アクションとしての社会として概念化されていることとなる。とはいえ先にも見たように，ブルーマーは，シンボリック相互作用論から見た社会を「シンボリックな相互作用としての社会」（society as symbolic interaction）[10] とも表現している。であるならば，次にこの「ジョイント・アクション」という用語と「シンボリックな相互作用」という用語との関連が問われなければならない。

ジョイント・アクションとは，別称「トランスアクション」（transaction）とも呼ばれ，それを指してブルーマーは「人間の相互作用の本来的形態」（real form of human interaction）と呼んでいる（Blumer, 1953＝1969a, p.110＝1991年，142頁）。すなわち，ブルーマーが「シンボリックな相互作用としての社会」と言うとき，そこで言及されている「シンボリックな相互作用」とは，その本来的形態としての「トランスアクション」（＝「ジョイント・アクション」）のことを指しているのであり，実は，この「本来的形態」としての「シンボリックな相互作用」こそ，前節で言及した「有意味シンボルの使用」と同義なものとしての第三番目の社会的相互作用に他ならない。その論拠となるのが，ブルーマーの以下の説明である。

「人間の集団生活とは，ジョイント・アクショ

ンないしはさまざまな個人の個々別々の行為を互いに混ぜ合わせることから成り立ち，それは，人々が言語を用いることによって，換言するならば，ミードの言う『有意味会話』(significant speech) によって可能となる」(Blumer, 1993, p. 163)。

なお，ここで「有意味会話」とは，ブルーマーにおいては，「本当の意味でのコミュニケーション過程」(process of genuine communication)，すなわち，そこにおいて，「ある身振りを呈示している人間が，その身振りが向けられている他者と同じように〔＝同じ見方で〕自分の身振りを見ている」(Blumer, 1993, p.179) 社会的相互作用のことを指す用語として用いられている。

では，ブルーマーにおいては，実際，このトランスアクションなるものは，如何なる性質ないしは特性を持つものとして捉えられているのであろうか。ブルーマーは，トランスアクションの性質について以下のように述べている。

「・・・・トランスアクションというものは（これこそが人間の相互作用の本来的形態であると思われるが），その生成の過程で構成され組み上げられて行くものだということである。そしてまさにそれ故に，トランスアクションは可変的な経歴 (career) を持つことを余儀なくされる。人間の相互作用とは，互いの行為への定義と再定義という運動を通じて流れ行くものである。トランスアクションは，個々人がめいめい相手を何度となく考慮に入れ，また同様に相手によって考慮に入れられる，その都度その都度で組み上げられて行くものである。他者が一定の行為を表出したとき，個々の参与者は，それに注意を向け，判断を下し，他者のその行為を，自分自身の行為を方向付けるための要因として用いなければならない・・・・そこにおいて参与者たちが，他者の行為に照らして自己の行為を方向付けているひとつの流動的な過程 (flowing process) という，ここに示した人々の結びつきに関する像が示唆しているのは，トランスアクションというものが，多様な方向へと展開してゆく可能性を多分に秘めているものだということである」(Blumer, 1953＝1969a, p. 110＝1991年，142-143頁)。

このように，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，トランスアクションとは，まず何よりも「可変的な経歴を持つ」「流動的」な特性を有するものとして，すなわち，形成・再形成を繰り返し経験するものとして捉えられているのであり，それ故そうしたトランスアクション（＝ジョイント・アクション）から構成される「人間の社会」もまた，等しくこの意味で「流動的」な特性をもつものと捉えられなければならない。

では，何故にトランスアクションないしジョイント・アクションは「流動的」な特性を持つものと捉えられなければならないのか。「流動的」という言葉が含意する二点（「形成」・「再形成」）のうち，ここではまず，その前者の点，すなわち，ジョイント・アクションが形成されてゆくそのメカニズムを明らかにしてゆくことにしたい。

ブルーマーによれば，ジョイント・アクションの形成は，先述のシンボリックな相互作用においてなされる。ここでシンボリックな相互作用とは，ブルーマーにおいては，ある「身振り」の呈示と，その身振りの「意味」に対するひとつの反応として定式化されている。ジョイント・アクションの形成において，身振りは，それを呈示する個人とそれが向けられる個人の双方に対して意味を持ち，両者に対して身振りが同じ

意味を持つとき，両者は相互に理解し合っている，とブルーマーは捉えている（Blumer, 1969b, p.9＝1991年，11頁)。無論，ここで「意味」(meaning) とは，相互作用に従事している個々人が，その身振りに付与したものに他ならないことは，前節の議論で確認済みである。またそうした付与という営みが，その個々人の「自己相互作用」を通じてなされているものであることは，言うまでもない。ブルーマーによれば，こうした身振りは，それを呈示する者とそれが向けられる者の双方に対して次のような三つの意味を有している（Blumer, 1969b, p.9＝1991年，11頁)。まず第一に，(a) 身振りの意味は，それが向けられた個人が何をするべきかをあらわす[11]。第二に，(b) その身振りを呈示している個人が何をしようと考えているのかをあらわす。第三に，(c) この両者の行為が接合されることによって生じるジョイント・アクションの形態をあらわす。それをブルーマーは以下のように例示している。

「たとえばある強盗が，被害者に向かって両手を上げろと命令するとき，その命令〔＝身振り〕は次の三つのことをあらわしている。すなわち，(a) 被害者がこれから行うべきこと〔つまり，両手を上げるという行為〕，(b) 強盗がこれから行おうと考えていること。すなわち，被害者からお金を奪い取ること，(c) 両者の間で形成されようとしているジョイント・アクションの形態。この場合は強盗である」(Blumer, 1969b, p.9＝1991年，11-12頁)。

身振りが有するこうした三つの意味を，身振りを呈示している者と身振りが向けられている者の双方が適切に把握し，その意味に基づいて互いに行為し合うとき，そこにジョイント・アクションが成立する，とブルーマーは捉えている。逆に言うならば，「この三つの意味に，どれかひとつでも混乱ないし誤解がある場合には，コミュニケーションは有効にはたらかず，相互作用は妨げられ，ジョイント・アクションの形成は障害にぶつかる」ことになる（Blumer, 1969b, p.9＝1991年，12頁)。すなわち，強盗ないしは被害者のうち，どちらかでも，身振りが持つこうした三つの意味のひとつでも把握し損ねれば，ジョイント・アクションの形成はおぼつかない，ということである。またここで身振りの意味を適切に把握するとは，相互作用に参与している両者が，その身振りに対して同じ意味を付与することを意味している（Blumer, 1967＝1992, p.52；1993, p.163, p.179)。

では，身振りを呈示している者と身振りが向けられている者の双方が，身振りの「意味」を如上の意味で適切に把握することは，如何なるメカニズムにより可能となっているのであろうか。そのメカニズムを解明するに際して，ブルーマーの次の説明が参考となる。以下の説明もまた，ジョイント・アクション論の文脈で書かれたものである。

「〔互いに相互作用し合っている〕個々人は，一定程度まで，相手の行為を，相手の観点 (standpoint of the other) から見なくてはならない。相手を一人の主体として，ないしは相手が自ら行為を行い方向付けている存在である，という観点から，その相手を把握しなければならない。こうして人は，相手が何を意味しているのか，相手の意図は何であるのか，相手がどのように行為してくるのかを識別することになる。相互作用に参与するいずれの側もこうしたことを行うことにより，かくして，各々は，単に相手を考慮に入れるのみならず，その相手を，今度は，自分のことを考慮に入れている相手とし

て，考慮に入れることになる」(Blumer, 1953＝1969a, p.109＝1991年，142頁)。

人々の結びつき方のその最も根源的な形態として「相互作用し合っている二人の人間」を措定し (Blumer, 1953＝1969a, p.108＝1991年，140頁)，そうした結びつきが持つ，その最も重要な特徴として「そこでの参与者たちの双方が互いに相手を考慮に入れている (*take each other into account*)」という事実に着目し (Blumer, 1953＝1969a, p.108＝1991年，141頁)，そこにおいて「二人が二人とも相手を考慮に入れている」(Blumer, 1953＝1969a, p.109＝1991年，141頁)が故に生じる，「単に相手を考慮に入れるのみならず，その相手を，今度は，自分のことを考慮に入れている相手として，考慮に入れることになる」という，ブルーマーが指摘するこうした現象を，「考慮の考慮」(taking into account of taking into account)[12] と名付けておこう。

すなわち，個々人が，互いに相手と相互作用を行い，ジョイント・アクションを形成しようとする際に用いる「自己相互作用」ないしは「解釈の過程」の内的メカニズムが，実は，この「考慮の考慮」なのである[13]。かねてより，わが国のシンボリック相互作用論理解，就中，ブルーマーのシンボリック相互作用論理解においては，この「自己相互作用」の内的メカニズムは，もっぱら「表示」と「解釈」からなる，としてしか捉えられてこなかった[14]。その原因のひとつとして，これまでのわが国におけるシンボリック相互作用論理解が，対パーソンズの社会学ないしは対構造機能主義社会学を意識しすぎるあまり，社会的相互作用の主体としての人間を，他者や外界に対して解釈を行う「解釈主体」として強調してきた一方で，そうした人間が他者によっても解釈されている客体としても捉えられなければならない，という点を比較的看過してきた，ということが挙げられる。そうしたわが国の研究動向について，井上は以下のように述べている。

「・・・・シンボリック・インタラクショニズム〔＝シンボリック相互作用論〕は，行為者の『解釈過程』を重視し，人間が何よりもまず『解釈主体』であることを強調する。・・・・しかし，人間が『解釈主体』であるということは，裏を返せば，他者によって解釈される『客体』でもあるということだ。私が他者を解釈するように，他者もまた私を解釈する。私は，私と同じく『解釈主体』である他者によって『客体』として解釈されることを避けることはできない。・・・・今日のシンボリック・インタラクショニズムは，しかし，私たちが否応なしに他者からの解釈を蒙る側面については，あまり注意を払っていない。それは，ひとつには，この派の『主体性強調のふくみ』からくるバイアスであろう・・・・いずれにせよ，シンボリック・インタラクショニズムにおいては，解釈の裏返しである『被解釈』の問題は，せいぜい，自我の形成過程についての議論のなかで，あるいは逸脱行動に関する『ラベリング・アプローチ』のなかで，部分的に扱われるにとどまっている。いわば『解釈過程の重視』に見合った重みを与えられていないのである」(井上，1988年，33-34頁)。

社会的相互作用に参与する主体を，自ら解釈を行う解釈主体であると同時に，他者からも解釈される客体としても措定するならば，必然的に生じてくる「考慮の考慮」という現象を，ブルーマーが1953年の時点で既に指摘していたにもかかわらず，かねてよりのわが国のシンボリック相互作用論理解においては，こうした現象に

対する考察があまりなされてこなかったように思われる[15]。

ブルーマーによれば，複数の人間が，互いに自らの行為を相手の行為に適応（適合）させ合い，トランスアクションないしはジョイント・アクションを形成しようとする際には，個々人はめいめい，必然的にこうした「考慮の考慮」という解釈的営みを行うことになると言う (Blumer, 1953＝1969a, pp.109-110＝1991年，142頁)。

先ほどの強盗の例に戻ろう。如上の引用を踏まえるならば，すなわち被害者は，まず相手の振るまい（＝強盗による両手をあげろという命令＝身振り）を，「相手の観点」（強盗の観点）から見なくてはならない。そのために，被害者は，まずもって強盗の観点を取得しなければならない。別言するならば，被害者は，その強盗をこれこれの観点を持っている者と解釈し定義しなければならないことになる。すなわち，「相手の観点」の取得とは，そうした「観点」をダイレクトに取得することを意味しているわけではなく，あくまでそうした「観点」を持っている存在として，その相手を解釈・定義することを意味している。こうして被害者は，その強盗の観点を手に入れることとなる。そうしてその観点を通して，相手の振るまい（＝強盗の身振り）を見，相手が何を意味しているのか，相手の意図は何であるのか，相手がどのように行為してくるのかを見極めることとなる。これがまさに「他者を考慮に入れること」(taking another person into account) ということが含意する内容である。なお，ブルーマーにおいては，「何かを考慮に入れる」ことは，すなわち，その何かを，「自分自身に表示する」ことを意味しており (Blumer, 1966＝1969a, p.64＝1991年，83頁)，それ故，この「他者を考慮に入れる」という営みは，その他者を，「自己相互作用」を通じて，解釈・定義する，という営みの一種と捉えられなければならないこととなる (Blumer, 1953＝1969a, p.109＝1991年，141頁)。ところで，忘れてはならないのは，この相互作用において，相手を考慮に入れる，という営みを行っているのは，その被害者のみではない，という点である。強盗もまた，被害者に身振りを呈示するに際しては，その被害者を「考慮に入れる」という営みを行わなければならない (Blumer, 1969b, pp.9-10＝1991年，12頁)。すなわち，強盗は強盗で，身振りを呈示するに際しては，被害者をこれこれの観点を持っている者と解釈し定義し，被害者の観点という解釈枠組みを手に入れなければならない。

この時点で，両者ともに互いに「相手を考慮に入れる」という営みを行っていることになる。とはいえ，それを両者とも行っているが故に，ブルーマーが指摘するように，「単に相手を考慮に入れるのみならず，その相手を，今度は，自分のことを考慮に入れている相手として，考慮に入れることになる」。上述のように，「相手を考慮に入れる」という営みに対応するのが，「相手の観点」の取得であった。では，「相手を，今度は，自分のことを考慮に入れている相手として，考慮に入れる」という営みに対応するのは如何なる事態か。ブルーマー自身，そのことについて明示的に述べてはいないが，少なくとも推論により解を導き出すことは可能である。再び被害者の立場に即して議論をすすめるならば，被害者は，強盗を，被害者を考慮に入れている相手として，考慮に入れている，ということになる。それはすなわち，被害者が，強盗を，被害者の観点を取得している存在として，考慮

に入れる（ここで被害者が獲得した「相手の観点」を，先の強盗の観点と区別して，暫定的に□としておこう），ということを意味することになる。では，ここで取得された□と，先の強盗の観点との違いは何であろうか。人間が把握する「現実の世界」(world of reality)（そこには，ある人間にとっての他者という存在も，当然含まれている）とは，あくまで，その人間が自らの「パースペクティブ」を通してみた「世界」(world) に他ならず，その世界のありのままの姿ではあり得ない，という，先に本論第１章で見たブルーマーの前提を踏まえるならば，それは次のように捉えられる。すなわち，強盗は，被害者を強盗のパースペクティブから見，その被害者の観点を取得している。換言するならば，そのパースペクティブを用いて，被害者をこれこれの観点を持っている者と捉えている（解釈・定義している）。つまり，強盗が持っている被害者の観点とは，必然的に，強盗のパースペクティブから見た被害者の観点ということになる。そうした□を被害者が取得するということは，すなわち，この□とは，被害者が取得した強盗のパースペクティブから見た被害者の観点を意味することになりはしないか。すなわち，ここで被害者は，必然的に，強盗のパースペクティブから見た被害者の観点を取得することになるのではないか。両者ともに「相手を，今度は，自分のことを考慮に入れている相手として，考慮に入れる」のであれば，当然ながら，強盗もまた，同様にして，必然的に，被害者のパースペクティブから見た強盗の観点を取得することになる。すなわち，両者とも必然的に「相手の観点」のみならず「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」をも取得し合うことになる。なお，ここで言う取得もまた，「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」を，その個人がダイレクトに取得することを意味しているわけではなく，あくまでそうした観点を持っている存在として，その相手を解釈・定義することを意味している。というのも，「相手を，今度は，自分のことを考慮に入れている相手として，考慮に入れる」という営みもまた，結局のところ，「相手を・・・・考慮に入れる」という営みに他ならないからである[16)]。

こうした社会的相互作用において，両者ともに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を正確に把握しているときにのみ，両者はそこで用いられている身振りに対して，同じ意味を付与することが出来る。

社会的相互作用に参与する個々人が，それに対して同じ意味を付与しているそうした身振りのことを，ブルーマーは特別に「有意味シンボル」(significant symbol) と呼んでいる。またこの有意味シンボルのことを「普遍的なるもの」(universal) ないしは「共通の定義（意味）」(common definition, common meaning) とも呼んでいる (Blumer, 1967＝1992, p.152)。

以上の議論を踏まえるならば次のように言えよう。すなわち，社会的相互作用に参与する自己と他者とが，如上の「考慮の考慮」を正確に行い，その結果として，両者が互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を正確に把握しているときにのみ，そこで用いられている「身振り」が，その両者に対して同じ「意味」を持つようになるのであり，そうした「身振り」が「有意味シンボル」（「共通の定義」）と呼ばれるものに他

ならない。

かねてより，わが国のシンボリック相互作用論理解をリードしてきた船津　衛は，「意味」の共有（=「共通の定義」の成立）という現象を以下のように説明して来た。すなわち，「他者にも自己にも同一の反応を引き起こす言葉や身振り」としての「有意味シンボル」（船津の言葉で言えば「意味のあるシンボル」））（船津，1995年，46頁）を用いることにより，相互作用に参与している自己と他者とは，互いのうちに「同一反応」を引き起こすことが出来る（船津，1989年，46頁）。ここで，自己と他者との間に「同一反応」が引き起こされるということは，すなわち，自己と他者とが，ある一定の「意味」を共有することを意味し（船津，1989年，46頁），そうした「有意味シンボル」による自他間の「意味」の共有がまさに「役割取得」である，と（船津，1989年，46頁）。「有意味シンボル」による自他間の「意味」の共有を説く，という視点は，宝月においても見られる（宝月，1990年，116-119頁，123-129頁）。とはいえ，徳川も指摘するように，こうした議論は一種の循環論法に陥っており（徳川，1987年，83頁），そもそもそこで用いられている「身振り」が「『意味のあるシンボル』へと転化し，自己にも他者にも『同じ反応』を引き起こすという『有意味性』を帯びるのはいかなるメカニズムによるのか」（徳川，1987年，79頁）を説明し得ていない。また同時にこうした説明は，シンボリック相互作用論の概念的柱石としての「自己相互作用」概念が，「意味の共有」という現象を説明するための分析枠組みとして，果たすべき説明機能を，十分に活用しきれているとは言い難い。

如上のわれわれの考察を踏まえるならば，そのメカニズムとは，次のように説明することが出来る。すなわち，社会的相互作用を通じて，自己と他者の双方が，「考慮の考慮」という解釈的営みにより，「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を正確に把握し，その結果として，ある「身振り」より，同一の「意味」を読みとったとき（換言するならば，同一の「意味」をその身振りに付与したとき），はじめて，その「身振り」が「有意味シンボル」となる，と[17]。

ブルーマーによれば，如上の経緯を経て個々人により形成された「共通の定義」が，ジョイント・アクションの規則性・安定性・再起性，ないしは，ジョイント・アクションの取るある一定の形態の固定的な反復を保障するという。すなわち，「共通の定義によって，〔ジョイント・アクション形成への〕参与者たちには，自分自身の行為を相手の行為と適合させるための，はっきりとした指針が与えられる。この共通の定義ということによって，様々な集団領域にまたがったジョイント・アクションの，規則性，安定性，再起性が最もよく説明される」と（Blumer, 1966＝1969a, p.71＝1991年，92頁）。なお，この引用からも分かるように，ジョイント・アクションの形成に従事している参与者たちが，この「共通の定義」に基づいて行為を行っているからといって，彼らが共通の行為を行っている，というわけではない。「共通の定義」とは，あくまで，個々人がそれぞれ従事している自らの個々別々の行為を，相手の行為にかみ合わせる（ないしは組み合わせる）ことを可能にする道具なのであって，共通の行為を行わせるものではない（Blumer, 1966＝1969a, p.70＝1991年，90頁）。

以上のここまでの議論を要約するならば，次

のように捉えられよう。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「人間の社会」とは，まず何よりも，人々が相互作用を通じて形成する「ジョイント・アクション」ないしは「トランスアクション」からなるものと捉えられている。またそうしたジョイント・アクションは，個々人が社会的相互作用を通じて形成した「共通の定義」に支えられることにより，その規則性・安定性・再起性が保障される。この「共通の定義」とは，相互作用に従事する個々人が，各々自己相互作用の一形態としての「考慮の考慮」という解釈的営みを行うことによって，互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を正確に把握しているときにのみ成立するものと捉えられている。

では，個々人によるこうしたふたつの「観点」の正確な把握は，如何にして可能となるのであろうか。

上記にも述べたように，ブルーマーにおいては，如上のふたつの「観点」(「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」) を個人が把握するということは，別言するならば，その個人が，相互作用を行っている相手を，自己の「自己相互作用」(「考慮の考慮」) を通じてこれこれの観点を持っている者と解釈・定義することに他ならない。井上も言うように，「・・・・人間は社会のなかで他者とともに生きなければならないので，『他者の経験を理解しようとする試み』を避けることはできない・・・・この試みにおいて私たちは，推測あるいは解釈に頼らざるをえない。他者の言葉，表情，挙動など，私たちにとって知覚可能なデータを解釈することによって，私たちは不可視の他者を少なくとも自分なりに可視化しようと試みる」(井上，1988年，31頁)。ところで，こうした解釈や定義はフリーハンドになされるものではない。そのための道具が必要となる。この点について井上は，「・・・・およそ解釈というものは，素手ではできない。解釈の作業には，それなりの用具が必要である。・・・・私たちは何よりもまず，感覚に与えられたデータの内容を整理し単純化するための『要約的カテゴリー』(summary categories) を必要とする。この種のカテゴリーなくしては，『解釈』はおろか，対象の単なる『記述』さえおぼつかない」(井上，1988年，44頁) と指摘している。ブルーマーのシンボリック相互作用論の場合，その道具にあたるのが「パースペクティブ」ないしは「定義の諸図式」であることは，先に本論第1章において述べた通りである。すなわち，そもそもこのパースペクティブないし定義の諸図式なくしては，人間は外界への解釈・定義という営みを行うことすら出来ないのである。また同様にして，自分自身という対象を形成するためのパースペクティブである「一般化された諸々の役割」なくしては，個人は自分自身との相互作用（＝自己相互作用）を行うことすら出来ない。では，このパースペクティブは何処より来るものと捉えられているのか。先にルイスに対するブルーマーの反論を検討するなかで明らかになったように，それは，個人が自らの状況を定義するに際して，前もって「他者たちの集団」から獲得したものであった。そしてそうした二つの図式（「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」）に方向付けられる形で，個々人は解釈・定義という営みを行うことになる。すなわち，「相互作用に従事する個々人が互いに『相手の観点』と『相手のパースペクティブから見た自分自身の観点』の双方を正確に把握す

ることは如何にして可能となるのか」という問に対する答を提示するならば，それは，個々人がそうした把握（＝解釈・定義）を行うに先立って獲得した，「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」というふたつの図式にその解釈・定義を方向付けられることで可能となる，とこたえることができる。「相互作用に従事する個々人が互いに『相手の観点』と『相手のパースペクティブから見た自分自身の観点』の双方を正確に把握することは如何にして可能となるのか」という問は，換言するならば，ジョイント・アクションは如何にして成立するのか，もしくは那須の言葉を再度用いるならば，ブルーマーのシンボリック相互作用論において「社会はいかにして可能か」と捉えられているのか，という問であると言えるが，上記の議論を踏まえるならば，それは次のようにこたえられよう。すなわち，ジョイント・アクションの成立は，その形成に参与する個々人が，その形成に先立って，解釈・定義を行う道具としての「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」というふたつの図式を獲得し，そうした図式にしたがって解釈・定義を行い，その結果として成立する「共通の定義」に基づいて互いに行為し合うことによって可能となる，と。そのことについて，ブルーマーは以下のように述べている。

「新しく形成されたものであれ，長い間確立されてきたものであれ，如何なるジョイント・アクションの実例も，必然的に，参与者たちによる先行する行為という背景（a background of previous actions of the participants）から生じてきたものである。こうした背景を離れて，ジョイント・アクションが新たに形成されることは決してない。新たに形成されようとするジョイント・アクションに関与している参与者たちは，いつでも，その形成に，彼らが前もって〔強調は引用者〕所有している対象の世界や一連の意味や解釈図式を持ち込んでくる。したがって，新しい形態のジョイント・アクションは，いつでも，それに先行するジョイント・アクションという文脈から生じてくるのであり，そうした文脈と結びつきを持っている」(Blumer, 1969b, p.20＝1991年，26頁)。

また，こうした経緯を経て，いったん形成された共通の定義が，同様にして，繰り返し参与者たちに継承され続けることによって，新たに形成されたそのジョイント・アクションのある一定の形態が保持され続ける，とブルーマーにおいては捉えられている。その点についてブルーマーは，以下のように述べている。

「通常，ある特定の社会において人々が出くわす状況のほとんどは，同じやり方で定義ないしは『構造化』(structured) されている。先行する相互作用を通じて〔強調は引用者〕，人々は，これこれの状況において如何に行為するかに関して共通の理解ないしは定義を創りだし獲得している。こうした共通の定義が，人々に，それまでと同様に行為することを可能にしているのである」(Blumer, 1962＝1969a, p.86＝1991年，111頁)。

ブルーマーによれば，こうした意味で，ジョイント・アクションは，参与者間の「水平的な結びつき」(horizontal linkage) を持つのみならず，それに先行するジョイント・アクションとの「垂直的な結びつき」(vertical linkage) も持つものと捉えられるのである。

第4節　形成されるものとしての社会

ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「社会」(society) とは，まず何よりも，

個々人が社会的相互作用（シンボリックな相互作用）を通じて日々形成する「ジョイント・アクション」(joint action) ないしは「トランスアクション」(transaction) から構成されるものと捉えられている。こうしたジョイント・アクションの形成は，その形成に参与する個々人の間に「有意味シンボル」(significant symbol) ないしは「共通の定義」(common definition) が成立することにより可能になるものと，ブルーマーにおいては捉えられていたが，そうした共通の定義は，個々人が，自己相互作用の一形態としての「考慮の考慮」(taking into account of taking into account) を駆使しつつ，互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を正確に把握（想定／解釈・定義）したときにのみ成立するものと捉えられていた。また，個人による，そうした正確な把握は，その個人が，自己を取り囲む「他者たちの集団」から，前もって，種々の解釈の道具（「定義の諸図式」(schemes of definition)，「一般化された諸々の役割」(generalized roles)）を獲得し[18]，そうした道具に，その解釈・定義を方向付けられる（＝ブルーマーにおける「社会化」(socialization)）ことによって可能になるものと，ブルーマーにおいては捉えられていた。また，個々人により作り出された共通の定義によって，ジョイント・アクションは，その規則性・安定性・再起性を保障される，とブルーマーにおいては捉えられていた。

以上，ここまでの議論で，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，1）「社会はいかにして可能か」が，2）その社会が如何に固定化されてゆくのか，そのメカニズムが明らかにされたと思われる。続く第3章では，こうした固定化され，規則性・安定性・再起性を保障されたジョイント・アクションないし社会であっても，必然的に再形成への扉を開くものと捉えなければならない，その理由ないしその論理的必然性を探ることとしたい（以下，次号）。